

菊池寛「友と友の間」について

中 田 茜

はじめに

菊池寛「友と友の間」は、『大阪毎日新聞』にて大正八（一九一九）年八月一日から十月一日まで全四十七回連載された中編小説であり、夏目漱石の長女である夏目筆子を巡る久米正雄と松岡譲の恋愛事件について、菊池寛の視点から描いたものである。

大正五（一九一〇）年十二月に夏目漱石が亡くなった後、久米と松岡は夏目家に頻繁に出入りし、漱石夫人である鏡子や、筆子を含むその子供たちと親しく付き合うようになる。そのうちに久米は筆子へ恋心を募らせ、鏡子に対し結婚の許諾を願い出、久米がもうしばらく勉強して立派な作家になることを条件に許された。しかし、漱石門下の先輩たちからの反対に加え、東京帝国大学を一年遅れて卒業した松岡が夏目家に寄寓するようになり、松岡と筆子の仲が接近し始めた事などから、久米は焦りを募らせる。そして、久米が夏目家に起きた一つの事件について「二挿話」という題で雑誌に書き、なおかつ、そこにあたかも久米と筆子の婚約が出来かかっているかのように書いたことで鏡子の不興を買い、ついに鏡子より婚約の撤回を言い渡される。久米が失恋した翌年、大正七（一九一八）

年四月に筆子は松岡と結婚した。以上が事件の概略である。

この事件については新聞各紙が報じ、世間の注目を集めた。また、久米を中心に菊池や松岡の手によって事件を題材とした多くの小説が書かれた。久米の「破船」はその集大成であり、この事件は「破船」事件と呼ばれるようになる。それほどまでに世間から注目を集めた理由について、新聞報道や小説の題材となったこと以外に、「相手が漱石遺愛の令嬢であったということだけでなく、久米の親友で、同じく第三、四次「新思潮」の同人だった松岡譲が夏目筆子と結婚するという「三角関係」の中で失恋であったということ^三や、単なる恋愛事件としてではなく夏目漱石の後継者問題として捉えられていた^四ことなどを上げる事ができる。

菊池が「友と友の間」を書いた大正八年には、既に久米の失恋や松岡と筆子の結婚が新聞で報じられ、ゴシップとして事件が世間の注目を集めていた。さらに、久米も大正七年頃より事件に題材をとった失恋物の執筆を始めている。菊池が、目新しさはないであろうこのゴシップを題材にした意図は何だろうか。

これまでの研究において、「友と友の間」が注目されたことは殆どなく、菊池寛の作品としては、「盗人を飼ふ」『新家庭』一月、

「葬式に行かぬ訳」「新潮」二月、「我鬼」「新小説」三月、「たちあな姫」「太陽」四月、「友と友の間」「大阪毎日」八月十八日（十月十四日）、「簡単な死去」「新潮」十月等の作品は、すべて身近に材を求めた点で「啓吉物」として一括しておいて好いだろう^五と、単に菊池寛自身をモデルとした「啓吉物」の一つとして見過^六されてきた。また、久米正雄「破船」や松岡譲「憂鬱な愛人^六」など、「破船」事件にまつわる作品の研究においても、第三者視点の資料として、「菊池の双方の立場を公平に慮つた觀察^七」、「かくして菊池は、理性と温情とを兼ね備えた目で、久米と松岡の、得意と失意を記録したのである^八」、「比較的公平な裁定を下している^九」など、久米と松岡双方に公平な見方が評価されるばかりで、そこからさらに踏み込んで論じているものは見られない。

しかし、「友と友の間」は、単なる「啓吉物」の一つとして、あるいは単なる「破船」事件の一参考資料として見過^{一〇}しておいてよい作品なのだろうか。

「啓吉物」は、菊池の身近に題材を取ったものだが、菊池の人生について読者が周知するようになるのはずっと後のことであり、少なくとも「友と友の間」が書かれた大正八年頃、菊池が文壇で認知されるようになった直後では、モデルとした出来事について知られていることはほとんどなかっただろう。当時既に新進作家として知られていた芥川について書いた「無名作家の日記^{一〇}」についても、片山宏行^二は、「たとえば『夜の脅威』がボツにされてしまう一件にしても、これが『坂田藤十郎の恋』のボツ事件に符合するのでは

ないかと推測できるようになるのは、芥川が当時を回想した「あの頃の自分の事」(『中央公論』大正八年一月号)を書いて、菊池の作品に同人がダメを出したという事実を公にしてからのことであるし、そもそも菊池が学生時代に京都でひとり苦悩していたという事実も、本作発表後に菊池自身が一連の身辺小説「啓吉物」を書き、さらに「半目叙伝」(『文藝春秋』昭和三年五月〜四年十二月)で明らかにしてはじめて広く知られるようになった事柄と言つていい」とした上で、「同時代の一般読者がどれほどこのモデル性に反応したかは疑問である」と述べている。「無名作家の日記」を含め、それまでの「啓吉物」など菊池の身近に題材を取った作品は、そのモデルが一般に広く知られているわけではなかった。だが、先にも述べた通り、「友と友の間」においては事情が異なる。既に新聞報道等で一般に知られ、久米の失恋物によつて注目を集めた題材であった。その点で、「友と友の間」はその他の「啓吉物」と同一に語ることはできない。

加えて、「破船」事件を語る作品としても、「友と友の間」の連載開始は、「破船」の連載よりも三年近く前であり、当時事件そのものについて書かれた作品がまだなかったことを考えると、初めて「破船」事件の全貌を語った作品であったと言える。何故、久米や松岡と言つた事件の当事者ですら語つていなかった事件の全貌を、菊池が作品の題材として扱つたのか。

本稿では、この小説が書かれた大正八年当時の文壇の状況などを踏まえ、菊池寛がどのような意図で「友と友の間」を書いたのか、

考察する。

一 「友と友の間」の執筆背景

「友と友の間」について論じる上で、どのような状況下でこの作品が執筆されたのかを見る必要がある。そこで、本章では、「破船」事件にまつわる作品群の一連の流れの中での「友と友の間」の位置づけと、「友と友の間」が発表された大正八年の菊池寛と文壇の状況を確認することで、「友と友の間」執筆の背景を見ていくことにしたい。

一―一 「破船」事件にまつわる作品たち

「はじめに」でも述べた通り、菊池によって「友と友の間」が書かれた頃には、既に久米の失恋物がいくつか発表され、この事件は一般の注目を集めていた。そこで、まず、「友と友の間」が書かれるまでの事件にまつわる作品が発表されていた流れと、「友と友の間」後に作品が発表されていく流れについて見ていく。

久米が鏡子から婚約破棄を告げられ、失恋したのは、大正六年の年末のことである。この失恋については、十二月九日付の『東京日日新聞』において、漱石の一周忌と併せて報じられた。その後、久米は「時的に故郷に帰るも、翌年の初頭には再上京している。その後、三月になって、久米は「受験生の手記^二」を発表、また菊池の

すすめで初の通俗小説である「螢草^三」の連載を始める。「受験生の手記」は想い人を弟に取られ、また受験にも失敗した主人公が失意のうちに故郷に帰るという点において、「螢草」は主人公の留学中に婚約者が親友に奪われたところから物語が始まる点において事件との類似性がみられるが、この二つの作品について久米は、事件との関りを否定して以下のように述べている。^四

ゾーデルマンの「エス・ワアル」からヒントを得て、うっかり恣んな題材を選んだで了った、最近の僕の事件と相似を持つものには少々弱った。さう云へば殊に今日の處は、野村が親友に戀人を奪はれて、一人淋しく山を下りる所なので、益々厭な氣持になった。天は實に皮肉を好む。その天の配劑は仕方が無いとして、知つてゐる讀者が或は「螢草」とあの事件とをアンデンティファイしやしまいかと恐れた。僕もあの事件を生るまゝ通俗小説にする程馬鹿ではない。たゞ親友と戀人との三角關係は、僕に取つては恐らく、漱石先生以上に永くテーマとするだらう。「受験生の手記」中の戀愛なども其戀愛だ。其點に於ては通俗小説でも變りはない。

しかし、「螢草」は当時から事件と関連させた読みがなされており、片山^五は、三月十七日に『時事新報』に載せられた連載予告文から、「このなかで注意を要するのは「著者がある重大なる覺悟を以て初て筆を下す」「興趣湧くが如き題材」の部分で、ここには当

時すでに一般読者が、久米正雄と夏目筆子との結婚問題が御破算になったことを周知していた、という事実が暗示されている」と述べ、「かくして『螢草』は、連載早々から見事なまでに現実と虚構の境を往還する悲劇として進行する、もしくは進行せざるをえない状況に置かれてしまった」としている。後に江口渙も『わが文学半生記』^{二六}において、「そのことについて久米は長篇小説『螢草』にかき、いく十篇かの短篇小説にもかき、さいごに長篇『破船』にくわしくかいた」と、『螢草』を久米の失恋物のひとつとして扱った。さらに、連載中に松岡と筆子が結婚したこともあり、田中保隆^{二七}は、「連載がはじまってしばらくすると松岡と筆子の結婚が報道されたので、読者は『螢草』に一種の同時進行的な興味を抱いた」としている。また、『受験生の手記』についても、久米の失恋物の「プロローグ的作品であった」^{二八}とされている。

「螢草」は成功を収め、菊池は「岐路」当時^{二九}という文章において、その成功について以下のように述べている。

そして、読者の反響は、回を追うに従って、波のように高まった。僕は、反響のハガキや手紙が来るのが大変うれしかった。僕は、それが十通位溜まると、まとめて、久米の所へ届けてやった。僕の見聞する限りに於て、新聞小説に於て『螢草』ほど、反響のあったものはない。僕自身、たいへん肩身の広い気がした。久米の才筆を予てから認めていた千葉氏も、自分の冒険が成功したのを欣んでいるようだった。作者の久米自身が、大得意になったのも

むろんである。

また、江口渙『わが文学半生記』では、その後の久米が多くの失恋物を書いたことについて、『螢草』での成功が原因であるとし、次のように述べている。

「たび『螢草』があたりと、久米はまた「あて」ようとしてはたびたびこの失恋事件をかいた。それも出来るだけ芸術小説としてかこうとしたが、いつもうまくいかなかった。それはともすると通俗作家としての彼の本質が地金を出しては、作品の芸術性を低めたからである。それでもこりずにあとからあとからかいた。あまりに同じ題材をかくので、私たちが「おい。君。もういい加減に夏目筆子を卒業しろよ」というと、久米は眼鏡こしに得意の微苦笑をにやりとうかべては、「こんどが卒業論文だよ。もう、こんどで卒業だから、これつきりかかない」といった。そういうながらまたかいた。「おい。何度、君は卒業論文を書くんだい」というと、おしまいには、「こんどのは博士論文だよ」といった。その博士論文なるものをまた何度かかいたあげく、最後にかいたのが『破船』であった。つまり久米は『破船』をかくために、十年近くのおいだその下書きばかりをしていたことになるのである。

四月になり、先に述べた通り『螢草』連載中に、松岡と筆子が結

婚した。この結婚については複数の新聞が報道しており、その報道が出た四月十二日のことを、翌五月に久米は「大凶日記[○]」という文章で発表している。その文章内で、久米はこれまでは鏡子との約束を守って事件のいきさつについて小説で書かず、記者に対しても話さなかったとした上で、「しかも其約束は向うから破棄され、しかも公人たる僕の人氣にも障る、かくの如き侮辱を以て酬いられた。あの人達は軍門に降つた捕虜をなぶり殺しにする氣とさへ見える。かうなつては僕も自己防衛のやむなきに至るだらう」と、新聞報道と対抗するため、自己防衛として事件についてこれからは発信していくことを宣言している。加えて、「事件の真相に就ては、いづれ發表の機もあらう。僕がその書くなど云はれても書かずにはゐられない告白小説を、棺を蔽ふに先つて自ら屍を洗ふ覺悟を以て書く時、その時こそかくも人の運命を狂はしむる罪が、果して誰人にあるか解るであらう。僕はその決心を初めて固めた」という文は、これから書く告白小説としての失恋物を予告しているようにも読むことができる。その宣言の通りに、久米は十二月に、「夢現^三」、「敗者^三」と事件を題材にした作品を立て続けに発表した。しかし、このふたつの作品は、「大凶日記」で予告したような事件の真相をそのまま描くものではない。「夢現」は、夢の中で久米（K・M）が松岡（N・H）を殺し最後には逮捕されるという創作色の強いものであり、「敗者」は事件後に松岡（Z）と再会した時のことを描いたものである。「夢現」は少々毛色が異なるものの、「破船」を除く久米の一連の失恋物は、総じて事件後について描いている。

「夢現」、「敗者」から、久米が次の失恋物を発表するまでには一年近く間が空いている。ただ、小谷野敦『久米正雄伝——微苦笑の人^三』によれば、「大正七年十二月二十八日の『よみうり抄』に、明後日より大阪毎日新聞に『破船 連載とあ』り、「大正七年（一九一八）といえは、その四月に夏目筆子が松岡譲と結婚して、久米が荒れ狂い、しかし時事新報の記者だった菊池寛が、文藝部長の千葉亀雄（一九七八—一九三五）を説いて久米に通俗小説『螢草』を連載させ、これがヒットした年であるから、久米は引き続いて『破船』を書くつもりだったと考えられる。しかしこれは実現せず、『明後日から』といえは十二月三十一日になるが、大阪毎日新聞では、一月五日から有島武郎の『小さき影』の連載が始まっている」という。「よみうり抄」に書かれた十二月三十一日から連載予定であった『破船』が、タイトルのまま、後に『主婦之友』に連載した『破船』と同一の話であつたならば、ある程度の構想は既に久米にあつたのだらうか。

事件をきっかけにして書かれたと思われる作品が、この頃久米以外にも存在する。芥川の『あの頃の自分の事^四』は、大正八年の一月に発表された、芥川の東大時代について描いたものであるが、この作品が書かれた経緯について、日比嘉高^五は以下のように述べている。

芥川がこの時期に、自分およびその周囲の過去を振り返った動機としては、「作家としてもう一度スタートラインに立つてみ

る」という作家個人のモチーフと、「彼に最も親しく近い友人同士が相食み、一人は空しく坐して葬られようとしていた」という周囲の状況への反応から来るモチーフの二つが主に指摘されている。ここで注目したいのは、後者の要素である。「あの頃の自分の事」に登場する同人たちは、創作から離れた成瀬をひとまず除き、当時それぞれにやっかいな事情を抱え、それは芥川自身にも火の粉として降りかからずにはいない性質のものであった。（中略）こうして一方的に言い立てる久米に対して、松岡は沈黙していた。このような松岡に不利な状況への、芥川なりの援護として、「あの頃の自分の事」の松岡の造形があると考えられるのである。

芥川のこの作品には、自身の作家としての戦略の外に、「螢草」をはじめとする久米の失恋物によって悪役に位置付けられていた松岡を擁護する目的があったという。また、同じ様に自分の学生時代を元に創作しようとした芥川作品に、「路上」^{二六}がある。しかし、「路上」は未完のまま終わってしまう。その未完で終わってしまった「路上」の紙面を埋める形で『大阪毎日新聞』に連載を開始したのが、菊池寛「友と友の間」であった。

「友と友の間」連載中やそれ以降にも、事件にまつわる、あるいは事件から派生して起きた新たな事件、所謂「良友悪友」事件についての作品が書かれていく。久米が十月十一月と連続して発表した「良友悪友」^{二七}、「帰郷」^{二八}である。「良友悪友」については、菊池

による同時代評が存在しているため、これを紹介する。

◆文章世界の久米正雄氏の「良友悪友」を讀んで見た。久米氏のものとしては傑作の部類に属させてもいいものだらう、よく描けて居る。ただ得戀とか、無戀とか云ふ變な言葉を使ふのは悪い癖だ。が、作品としては、一寸文句のない位よく出来て居る。然し、主人公が所謂良友のもつと本質的な非難を、「悪友と遊ぶな」と云ふやうに自家弁護的に解釋したり、又その「悪友と遊ぶな」と云ふやうに解釋した非難を、良友側から惡友側へ小学兒童か何かのやうに直ぐ云ひ付ける態度にはあまり賛成しない。

二九

菊池は、「良友悪友」を「傑作」とした上で、作中の久米の態度について「小学兒童か何かのやうに」と揶揄し、「あまり賛成しない」としている。そうした菊池の「良友悪友」に対する苦言は、そのまま、大正九年一月に発表された菊池の「神の如く弱し」^{三〇}という作に表れてくる。この小説において、菊池は先ほど引用した同時代評と似た趣旨の苦言を更に厳しい言葉で呈している。「神の如く弱し」の同時代評を見るに、菊池のこの作が久米の「良友悪友」と対応していることを、読者は把握していたようである^{三一}。『中央公論』に載ったこともあり、「神の如く弱し」には同時代評が多数存在しているが、その中で注目したいものが一つある。『文章世界の「雑記帳」』^{三二}だ。その本文の一部を以下に引用する。

菊池氏の「神の如く弱し」は久米正雄氏をモデルにしたものであることは言ふまでもなくかなり際どいことまで素破抜いてある。菊池氏は嘗て「友と友との間」といふ作でも久米氏をモデルにし、而も矢張り久米氏と故漱石の令嬢（今の松岡譲氏夫人）との戀愛事件を取扱つて居た。これは久米氏の「良友悪友」が祟つたのであるまいが（何故なら「良友悪友」の中では、菊池氏はあんまり酷く書かれて居ないのだから）、かう度々種にされては如何に善良そのものの様な久米氏だといつても、何とか一矢酬いざるを得なからうと、今からもうその作の現はれるのを期待して居る者がある。久米氏以て何となす。

ここでは、「神の如く弱し」と「友と友の間」を並べ、菊池が一方的に久米をモデルとした小説を書いて来たことを指摘し、さらに「何とか一矢酬いざるを得なからうと、今からもうその作の現はれるのを期待して居る者がある」と、久米の菊池に対する反論を期待する声を紹介している。実際に久米の反論を期待する声がどの程度あったのかは不明だが、この記事が指摘している通り、久米のこれまでの失恋物においては、菊池が登場することはほとんどなく、はっきりと菊池だと読者が判断できる仕方では菊池が登場するのは「良友悪友」のみである上、その「良友悪友」でも、「雑記帳」が述べる通り、菊池（H）は芥川（A）などと比べて悪くは書かれていない。

「良友悪友」以外でも、「神の如く弱し」以前の久米の失恋物で菊池がモデルとなつて居る人物を探そうとすれば、「敗者」と「帰郷」にHというキャラクターを見付けることができるが、「敗者」では、その登場箇所は、「併し私の大阪行が企てられた時、私のために本氣に同情して、留めて呉れたのはH一人だつた」というたつた一文のみであり、「帰郷」においても、帰郷前にK（久米）と別宴を張つたY（山本有三）が、「TとSと俺と、揃ひも揃つて、餘りときめてゐる人物ぢやないね。みんな世の中の落伍者だ。考へて見れば此際のKを送るには最も適當した仲間ぢやないか」といい、それに呼応してKが「それは全くさうに違ひなかつた。RもHもEもIも、私と而して此問題とに近しい、元氣のある連中は誰も來てゐなかつた」と思うその一カ所のみだ。「敗者」、「帰郷」において、Hが菊池であるとの程度読者が気づいていたかは不明だが、あまりにHの出席と情報が少なく、「良友悪友」以外の作では読者はHの登場を全く氣に留めていない可能性もある。菊池が「友と友の間」、「神の如く弱し」の二つの作において、久米をモデルとし、さらに厳しい言葉を述べているのに対し、久米から菊池への反論が未だなされていなかったとすれば、その反論をどこか期待してしまうのも自然な流れであろう。

そうした「久米氏以て何となす」という期待に応えるようにして、久米は「和霊^三」を大正十年四月に發表する。この作は、「神の如く弱し」と対応するところが多く、また、「神の如く弱し」に対する反論がなされている。同時代評^四でも、「單なる憶測」とした上

ではあるが、「作者の意圖の一半は」、「神の如く弱し」などの菊池の作に対する「抗議提出といふ點にある」と触れられていることから、一般読者にとつても「和霊」が菊池に対する反論を含む小説であることは認識されていたと考えられるだろう。以下は、「和霊」からの引用である。

私は彼が、「病氣に障ると思つて黙つてゐた。」と云つた言葉を改めて思ひ返して見た。而してあれだけ人間の心持を解つてゐるべき筈の彼でさへ、矢つ張り人の氣を察する事は出来ないのだと思つた。(中略) さう云へば池田の考へ方は、あの申し出に對する考察にしても、一應深くは入つてゐながら、妙に意地とか男子の體面とかに囚はれた考へのやうに思はれてならなかつた。更に突き込んで云へば、其の考へ方は、私一個の問題としてではなくて、彼ら友人が一種の見榮のために、彼等に取つて私が立派であらせたい爲めに、さういふ處置を取つて呉れたのだと、少し有難迷惑に考へられないでもなかつた。彼ら友人たちは常に私が凜として立つてゐる事を、彼らの見よいといふ立場からばかり望んだ。

「彼」そして「池田」というのが、この作品における菊池のことである。ここでは、菊池からの同情を「彼ら友人が一種の見榮のために、彼等にとつて私が立派であらせたい爲めに、さういふ處置を取つて呉れた」のではないかと疑い、「神の如く弱し」で菊池が書

いた夏目家が病氣の久米に金銭的援助をしたいという「申し出に對する考察」を、「一應深くは入つてゐながら、妙に意地とか男子の體面とかに囚はれた考へのやうに思はれてならなかつた」と批判する。さらに「和霊」では、「池田は又向うの家を離れ過ぎ、争鬭の外部にゐて、たゞよく報告を聞いたに過ぎなかつた」、「又殊に池田が、私に對する純粹な友情から、(杉浦の立場を認めつゝも)私に示して呉れた同情は、同情それ自體は涙ぐましい程感謝されても、まだ事件の正當な批判から出たと云ふ、公平な根底を持たない淋しさを私に感じさせた」としている。これらの文は、菊池が「友と友の間」で事件について描いたことに對し、菊池が事件では部外者であり、その批判は正當性を持たないことを指摘すること、それに反論したともとれるものではないだろうか。

これまで、菊池が「破船」事件について書いた「友と友の間」や「神の如く弱し」は、「その間、作家仲間もかねてから久米の戀愛病體質と失戀への執着を揶揄し、あるいはそれを「神の如く弱し」と弁護し、またそうした「友と友の間」(菊池寛『大阪毎日新聞』夕刊、大正八年八月十八日・十月十四日)を一般読者に報告して、結果的には久米の失戀物語につごうよく便乗する形となつた^{三五}」と、菊池が久米の失戀物に便乗したとされることが多かつた。しかし、こうして見ていくと、菊池が単に久米の失戀物の流れに乗つただけではなく、久米に便乗した菊池に、さらに久米が便乗した流れをも見る事が出来るのである。

また、この「菊池の發明した「神の如く弱し」という名文句は善

意の被害者としての久米のイメエジを普及させた^{三六}」とされており、その後の久米の作について論じた同時代評を見ても、『神の如く弱し』と云ふレツテル^{三七}、「氏の神の如く弱い心持^{三八}」と、「神の如く弱し」という文句が久米を表す代名詞のように扱われていることから、久米が作っていた「敗者」あるいは弱者としてのイメージを菊池が補強していたとも言える。

「和霊」以後にも、久米は「破船」を書き、そして沈黙を続けてきた松岡が「耳疣の歴史^{三九}」を書き、さらに久米の「墓参^{四〇}」や松岡の「憂鬱な愛人」へと、今度は久米が作り菊池が便乗した流れに、松岡が加わっていくことになるのであるが、その点については割愛する。

一一二 大正八年の文壇と菊池寛

本節では、菊池寛「友と友の間」が『大阪毎日新聞』に連載された大正八年がどのような年であったのかを見てみたい。

菊池にとつて、生活の面から見て大正八年は大きな変化があった年だった。片山^{四一}は、「菊池にとつて大正八年は、実生活上において特に画期的な年であつた」とし、三月に芥川龍之介とともに『大阪毎日新聞』に入社したことを上げて、「社会部の外交記者として苦手の訪問記事を書くために、時と所とを選ばず駆けずり回つていたそれまでの時事新報時代に比べれば、当初こそ社会部の編集局所属ではあつたが、十月には学芸部勤務となり、毎月の出勤を免除さ

れ、俸給も時事の月四十三円から同年末には月七十円、ほかに臨時手当が二十三円支給されるという格段の相違であり、「何よりも恐れていた経済的逼迫からもひとまず解放されて、精神的にも生活的にも、いまだかつてない安定を得たということがいえる」と述べている。

では、その大正八年において、文壇はどのような状況にあつたのだろうか。大正八年の文壇についてよく語られるのは、その華やかさである。

山本芳明『文学者はつくられる^{四二}』によれば、大正の初めは明治から引き続き、出版界は不況であつた。しかし、大正八年に状況は一変し、「文学市場」は需要過剰の市場として形成されようとしていた。それは、作家たちにとつて、まさに「文運隆盛時代文壇黄金時代」(加能作次郎「早魃時の樹木」「新潮」昭3・8)の到来を意味していた。さらに、「こうした「需要過剰」は原稿料の値上げという事態を引き起こし、「大正九年までには、出版業が優良なビジネスに成長し、中でも〈文学〉出版は優良株で、安定した右肩上がりの市場を形成していた」という。

当時書かれた文章からも、大正八年の華やかさがうかがえる。宮本新三郎は「大正八年の文壇を論ずる書^{四三}」において、以下のように述べている。

全く君の言はれる通り最近の文壇は賑かだ、華かだ、外見には活気があつて生気が漲つてゐるやうに思はれる。表面的な意味で

又文壇は確かに賑かだ、華かだ。此の傾向は独り最近といふだけに止まらずして、実に大正八年度文壇の蔽ふべからざる事実であると云つてよからう。新しい雑誌はどしどし出て来る。新進作家は日に日に其の数を加へて行く。今年今までに発表された作品の数と云つたらどんなに多いことか知れない。新聞雑誌の広告を見ると、毎月大抵は二三人位宛の偉大な新進気鋭の作家が紹介されてゐた。僕は心竊かに若しこんな傾向がいつまでも続いたら、文壇は偉大な作家ばかりの集りになつて仕舞ひには困ることになりはしないかとさへ思つた。

不況から脱し、一気に需要過剰の市場を形成したその原因は何だつたのであろうか。山本は、原因について以下のように述べている。

「こうした事態を招いた一番の原因は何であらうか。広津は『中央公論』が文芸欄によつて売れ行きを延ばしたことをあげ、「啓蒙期の知識層が一冊で何でも載っている雑誌を便利としたためであらうか」と述べ、「思想界も大いに賑わい」「そういう機運が『中央公論』一つでは間に合わなくなり『改造』『解放』等を輩出させたのであろう」とまとめている。しかし、柴田の説明ではそうした因果関係を否定し、新聞というメディアと同様の事態を指摘する。「それは雑誌の経営者中に定見の無い人が多く、徒らに『中央公論』型を踏襲する雑誌が急に殖えて来たからである」と。

加えて山本は、「こうした出版界の好景を支えたものとして、『新しい出版販売システム』と『流通・販売機構の発達』を挙げ、『新しい出版販売システム』については、「近代の出版販売の歴史は雑誌・書籍の乱売競争、割引競争の歴史でもあり、原価を切つて売るといったことが常態だった。これではいくら売つてもさほど利益があがるはずはなかった。その状態を改善するために、東京堂の大野孫平が中心となつて東京雑誌組合が結成されることになった」と述べている。『流通・販売機構の発達』については、清水文吉『本は流れる^{四四}』が詳しい。清水は「大正期は実質十四年の間に、出版物の発行総量は二・二五倍の増大をみた。小学校六年までの義務教育制が完全実施されて識字人口がひろがり、出版にとつて好条件になったことが主因だろうが、出版業界における流通・販売機構が明治末期に比して、一段と改良し、発達し、全国隅々まで出版生産地（東京、大阪、京都など）から直送できるようになったことも要因である」としている。さらに、「大正期の取次業界で特筆すること」は、出版物の輸送にはじめて自動車を採用したことである。それまでは人力、車力、馬力をもつて集品、配送を行い、自転車がよく一般に普及しはじめて取次も採用していたが、自動車採用は画期的なことで、いわば『輸送革命』ともいうべき快挙であつた」と述べ、「大戦終止直後の大正八年頃から、四大取次は新状況に対応して自動車輸送熱が再燃し、激烈な輸送競争に勝つためには、もはや自動車以外になしとして、再び北隆館をはじめとして大取次店各社

は自動車運搬体制の整備に力を入れた」という。大正八年頃、流通においても大きな変化があった。

ここまで大正八年が出版界、文壇にとつて華やかな年であつたことを見た。しかし、単に華やかであつただけではなく、需要過剰であつたことが新たな弊害を引き起こしている。柴田勝衛^{四五}は大正八年の雑誌の創作欄について「年中きらびやかな着物ばかり着飾らせられて」といるとした上で、以下のように述べる。

繼子扱ひにされるのも餘り快くはないが、それかと云つて斯う無闇矢鱈に可愛がられるのも、自由を要求する文藝子に取つては迷惑至極な話である。従つて四方八方から引張り風の所謂流行作家は豫定の注文が引受け切れずに、自分の責任を果す爲めに已むを得ず舊作の蒸し返しを掴ましたり、翻譯でお茶を濁したり、後進の紹介で逃げを張つたりしなければならなくなる。近頃の諸雑誌に偶々此種の原稿を散見するのは、決して雑誌社が原稿料の出し惜しみをして無名の作家を漁つて居る爲めではなく、寧ろ限られた作家の生活能率に對して需要過剰の傾向の然らしむるものが多いからである。

(中略)

出る雑誌も出る雑誌も此類型が破れずに、毎月締切間際になると、甘い物に蟻の集まるやうに、十指に足りぬ流行作家を取圍いて平身低頭して居る。此分で行くならば幾何多産な作家でも、大抵年餘にして脳漿を涸らして仕舞ふのは當然の話である。

大正八年は需要過剰が行き過ぎ、作家による供給が追い付いていない状況であつた。そこから起きるのは文壇全体での創作のマンネリ化である。このマンネリ化と需要過剰の問題については菊池もはっきりと認識し、問題視していたことが、菊池の匿名による「文壇は疲れてる^{四六}」という記事から分かる。この匿名記事において菊池は次のようにして「文壇は疲れてる」ことを主張する。

毎月十幾つかの雑誌が、必然的に機械的に各自三四篇の創作を掲載する。従つて毎月四五十篇に近い創作が是が非でも需要される。夫を創作家、夫も豫後備や候補生などは除いて現役にある人と云へば極めて少数の創作家が、是が非でも供給しなければならぬ。需要は飽く迄も、機械的である。然し供給の方は、どんな濫作家でも、粗作家でも、作家と云へば幾何か人間であるから、さう機械的にピョイ／＼と需要に應じて、作品を産み出す譯には行かない。従つて、作品にいびつのもや、未完成品や、粗製の物が餘りに多過ぎる。大抵の作家が、題材拂底で、ヘトヘトに疲れて居る。書きたくもなさそうなものを、書いて居る。否書かない方が寧ろ、よさそうなものを書いて居る。雑誌業者の督促と生活の必要で嫌々ながら書いて居ることが、作品の上に餘りに露出し過る。

需要過剰の状況によつて文壇には「愚作や、悪作や未完成品」が

溢れ、しかもそれは作家が進んで発表しているのではなく、「どんな自惚の強い作家だつて、自分の創作が拙い時には、拙いとは思つて居るのだが、編輯者への義理（夫も生活の爲に強ひられる義理が）と自分の生活の爲に、賤々ながら發表するのだ」とし、その状況を理解せずに批評する批評家について、「さう考へれば、惡作だからと云つて、粗作品だからと云つて、眞向から叩き附ける批評家は、餘り作者の生活に同情がなさすぎる」と批判する。この記事は六回にわたり掲載されたが、その最終回である六回目は副題を「作家に休養を與へよ」とし、以下のように記事を締めくくる。

現在の如く多くの作家が、生活の爲めに毎月否でも應でも、創作を要求せられるやうでは、文壇は此の上にも疲れて行きはしないかと心配する。

恒産のある作家には此の危険は比較的少いが、筆に依つてのみ衣食して居る作家に取つては、此の危険は甚だしいだろうと思ふ。「作家に休養を與へよ。文壇は疲れてる」と云ふ言葉を以てこの月評を了りたいと思ふ。その休養が如何なるものであるかは、又別な問題だ。

これらの記事によつて菊池は「文壇が疲れてる」ことを指摘し、需要過剰によるマンネリ化——未成品や失敗作ですら發表しなければならぬこと——は文壇全体に起きていることだとして、その行く末を案じている。

では、その時の菊池の状況はどうであつたのだろうか。片山^{四七}は「まず大正八年全体を見渡して感じられるのは、ひとことで言つて多産だが新味がないということである」と述べ、菊池の大正八年を「安定と停滞」の年であるとしている。加えて、大正八年の菊池の批評には「批評および批評家について述べたものが論鋒鋭く目につく」とし、その主張を「要するに、自分の創作について云々する資格のない者が、したり顔で勝手放題を言う現状は我慢がならないということである」とまとめ、「もつとも菊池のこうした苛立ちの表明は、逆にこの年いかに菊池の作品について論じられることが多かったかということの証左でもある。（中略）個々の作品のみならず、この年は菊池寛その人がさかんに論じられ始めた時期でもあつた」とした上で以下のように述べている。

同じ文章の別の個所でも「内心の本質的な欲求に萌さない作品でも生活の爲には發表しなければならない」と繰り返しているように、この年の菊池は中堅作家としてさまざまな批評にさらされながら、生活のためには不本意な作品でも發表せざるを得ないという一種のディレンマに陥つていたように思われる。もつと言へば、「人間性の道徳」という「内心の本質的欲求」に基づいて書いた「恩讐の彼方に」は認められず、一方では求められるままに会心の出来とは言いかねる作品を公にせざるを得ないといった割り切れぬ思いを強くしていたのではあるまいか。

「文壇は疲れてる」と主張した菊池だが、本当に「疲れてる」のは菊池自身だったと言える。この頃の菊池が「疲れてる」ことについては、菊池の生活に安定を与えたはずの『大阪毎日新聞』の社友になったことについて、柴田勝衛から「今年の春芥川龍之介、菊池寛の両氏が『大阪毎日新聞』に入社して、『東京日々新聞』に『日々文藝』を創立した際私は両氏の活躍に大なる興味を有つた一人であるが、其後の業績に徹してみると、両氏は矢張り本統の力を出し切つて居ない、金だけの事しかして居ない、例の資本主義の廣告が二つだけ殖えたと言ふやうな觀念を私は棄てる譯には行かなかつた」と厳しく批判されていることからわかる。柴田は「大阪毎日新聞」が芥川龍之助、菊池寛、水上瀧太郎の三氏と特殊に關係を結んだのは、「大阪朝日新聞」が三宅雪嶺、厨川白村の兩博士及び内田魯庵氏と密接な關係のあるのに對抗した應症濟である。一方が學者で行くなら此方は文士で行かうと云ふ策略である。策略は單なる策略で文藝などは何うでもよいと云つた有様であつた」と『大阪毎日新聞』自体をも批判し、また、その他の新聞についても、「要するに現今の文藝欄は押しなべて、新聞經營者に文藝に對する本統の理解があつて生れたものでなく、單に各新聞の對抗政策上、言ひ換へれば資本の剩餘を世間に對つて廣告する必要上、大新聞の表看板に出して居るやうなものに過ぎない」としている。

「友と友の間」が掲載されたその当時の『大阪毎日新聞』についても少し見ていく。「友と友の間」が掲載されたのは夕刊であつたが、『毎日新聞七十年^{四八}』によれば、夕刊を發行するようになった

のは大正四年十月十日からであり、「夕刊は、同じくニュース報道といつても朝刊とは異なつた味をだすことを工夫、材料の取捨、記事の書き方、紙面の体裁を変えると同時に、特に連載読みものに力を入れた。しかし、夕刊を發行することになつた理由をしてみる」と、「第一次世界戦争が起つて重大ニュースが殺到、号外の連続發行その他戦時経費が著しく増大して、本社でも大朝でも収支採算が採り難くなつてきた」ことに加え、「大朝から夕刊發行について申入れがきた」ことを受けて、「大朝が發行する以上本社も發行しなければならぬと決心し」たとしている。たしかに、柴田の言うように、『大阪毎日新聞』の戦略には『大阪朝日新聞』への對抗という意識が大きく関わつていたと言えよう。また、篠崎美生子^{四九}は、『大阪毎日新聞』の小説戦略について、「1908年上半期は、夕刊一面の連載にほとんど休載がなく、『大毎』がいかにかに夕刊一面「小説」欄に力を入れていたかがよくわかる」としながらも、「雑誌「創作」の世界で活躍する若手作家たちを呼び込むことで、夕刊一面の連載読み物売りだそうとしかけた『大毎』だが、先にも述べたように、その紙上には雑誌「創作」の作法が無遠慮に持ち込まれることになつた。それに伴つて、『大毎』の夕刊一面の扱いにも変化が生じている」と述べ、「もともと小さかつた挿絵がますます小さくなおざりなものになり、挿絵のない日や挿絵の全くない連載、果ては「創作」そのものの休載も増え、長編小説や講談の扱いとはかけはなれたものになつていったのである」としている。「雑誌「創作」作法の『大毎』紙上への越境」もまた、需要過剰によるマンネリ化が引

き起こしたかどうか。「友と友の間」の連載開始は、既に『大阪毎日新聞』の夕刊一面の扱いが変化したあとのことである。

菊池と共に『大阪毎日新聞』に入社した芥川についても、この時期の創作のマンネリ化が指摘されている。三好行雄^{五〇}は、「大正七年の暮れから大正八年にかけての作品に、いうところの『芸術家としての死』の徴候は歴然としている」とし、「発想の枯化、趣向の固定はようやく顕著であつて、龍之介の自省は決定的外れではなかったようである」と述べている。また、そのマンネリ化からの脱却しようとした芥川の試みについても、三好は以下のように述べている。

「芸術家としての死」に相前後して、芥川龍之介は「あの頃の自分の事」（大正八年一月）以下の現代小説の試みに手を着けはじめている。「死に瀕した」作家がみずから新しい可能性を開くための、いわば「秋」にいたる模索の端緒であり、試行は「私の出遭つた事（のちに「蜜柑」と「沼地」）（五月）や「路上」（六月—八月）を経て「葱」（大正九年一月）にいたる。作家の私的な体験にまで降りたつて現代を描くという、形としては私小説にちかい作品もふくまれているが、この年の芥川龍之介はようやく歴史に仮想するむなしさを、にがい自覚としてはじめていたようである。

挫折した長篇「路上」はその意味で、もっとも重要な試行だったはずである。大正六年の險路を長篇「偷盜」の試みで超えよう

としたように、龍之介はふたたび、短篇的世界の枠をみずから破つてするための賭けを試みている。「あの頃の自分の事」は第四次『新思潮』創刊直前の自己とその周辺を描いた観念的な私小説だったが、「出帆前夜」の青春を回想するおなじモチーフを、虚構と想像力でもういちど対象化しようとしたのが「路上」である。龍之介の分身と見ていい安田俊助をはじめ、さまざまな登場人物の後景には、作者自身の青春の記憶がおもく沈んでいたにちがいない。不慣れな長篇にあえて挑む野心とともに、この作の比重が決して軽からぬゆえンである。

また、「あの頃の自分の事」が「初心」の回想は、漱石の推輓によつて世に出た感動の記憶とも一体不可分だったはずで、停滞からの脱出を試みる作家の心情が、漱石の存在にまでとどいていたという想像は決して不自然ではない」とした上で、「路上」になると、漱石の文学はもつとはつきりした形で、作品の表面に影を落としていく。長篇小説という未踏の領域を開くために、龍之介は「三四郎」を下敷きにして、この小説を書きはじめた形跡がある」とし、「あの頃の自分の事」と「路上」の両方において芥川が漱石を意識していたことを述べている。

前節でも述べたように、芥川の「路上」は挫折し未完のまま終わり、その代わりとして「友と友の間」の連載は開始される。三好の言うように、「あの頃の自分の事」や「路上」で芥川がマンネリズムからの脱却を図ろうとしていたならば、菊池はそれを間近で見な

がら、しかも自分が「疲れてる」ことや自身の創作の停滞を自覚しておきながら、ただ漫然と需要されるままに書いていたのだろうか。芥川の「重要な試行」が直前まで行われたいたにも関わらず、「金だけの事しかして居ない」のだろうか。何とか自身も停滞から脱却しようとしていたのではないか。

「友と友の間」について考える上で、もう一つ触れておきたいことがある。それは、「文壇小説」の流行についてだ。

日比嘉高^五は、芥川の「あの頃の自分の事」を論じ、「文壇小説」

(こ)では「文壇交友録小説」の流行について「文壇交友録小説は、やはり登場人物を實在の人物(多くは作家)に同定して読もうとするモデルに対する関心とは切り離しては考えられないし、だからこそ各々の作家たちのさまざま作品同士を関連させて読む面白さをも現出する。そしてその背後には、生田春月が「自然主義の崇り」と述べたところの、〈現実〉と照らし合わせて読む読書慣習がより基底的、長期的なレベルの変化として存在していた。大正期に広がりを見せた文壇交友録小説は、それに隣接して短期的に流行した回想記や告白小説と運動しながら隆盛を見せたのだ」と述べている。

また、前田潤^五は、「大正期の『文壇』が、その天窓を開け放つて内部を曝し、そこに起居する選ばれた者達の素顔と個性を売り物に読者を呼び込んでいった」と言い、「文壇小説」について以下のように述べる。

作家が様々な形で「日常」を公表してゆくことは、作家周辺の錯綜した人間関係、つまり「文士」達の「交友」の諸相を浮上させてゆくことに繋がる。同人誌グループの境界を超えて幾重にも重なり合うそうした「人」の繋がりには、常に変貌し続けながらも徐々に露呈され、やがては総体として大正期「文壇」の輪郭を映し出す。かくして書き手と読み手の双方が欲望する場としての「文壇」が、メディアの導きによってその特異な姿を現してくる。

一方、「文壇」に繋がれてあることが、職業作家としての存在を保証するという状況の中では、自らを語る行為に加えて、「文壇」所属の「友」を論じ、「友」を書くことが、書き手の立脚地をより強固なものとする意味を持つ。それは、「友」に論じられ書かれることで、「文壇」における認知の度合いが高まるという事情と相俟つて、書き手たちの相互言及を活性化する。

「友」を書くことで「文壇」の姿を形作るだけでなく、自身を「文壇」に結びつけたという。さらに、前田は、菊池の「無名作家の日記」を、「菊池寛が自己と『文壇』とを強く結ぶために画策した『文壇小説』に他ならない」とし、当時の菊池の状況について「つまり菊池は、この時期も京都時代に続いて、大正五年後半から六年度にかけての芥川や久米の登場ぶりを日々目の当りにしつつ、作家として名の出ることを夢見ていたことになる」、「京都時代と同程度の劣等意識を彼が抱いたとしても不思議ではない」と述べた上で、「無

名作家の日記」における菊池の戦略を次のように述べている。

菊池の目はただならぬ冷徹さで、「文壇」という場を見つめている。書き手が「作家」となるために、当時もつとも有効であった試み。自己を露わにし、文士仲間を書くことで、「文壇」との紐帯を強化しようという目論見。菊池寛は自分の経歴を書き、自分を書くことで「芥川」や「久米」を招き寄せ、そのことによって彼等のかねてからの「友」としての自分を「文壇」内に浮上させようと図ったのではなかったか。「新赤門派」、「新理知派」、「新技巧派」の名で括られる新進の文士集団に帰属するものであることをはつきりと意識させ、人気作家の芥川・久米に連なり、彼等と伍してゆくものであるとの印象を刷り込むことは、「文壇」への登龍門をくぐり抜けようとする者にとつて是非とも必要な処置であつたに違いない。

菊池は「無名作家の日記」で既に「文壇小説」を書いていた。「無名作家の日記」を書く事で、「芥川」や「久米」を招き寄せ、そのことによって彼等のかねてからの「友」としての自分を「文壇」内に浮上させようと図ったのである。

久米や松岡、芥川、夏目漱石などが登場する「友と友の間」もまた、「文壇小説」と言えるだろう。そうだとするなら、菊池は「友と友の間」で何を図ったのか。その考察については三章に譲ることとする。

二 「友と友の間」、「破船」、「憂鬱な愛人」

菊池寛「友と友の間」、久米正雄「破船」、松岡譲「憂鬱な愛人」は、多少の前後はあるものの、概ね同じ時期の同じ出来事について描いた小説であり、その内容には多くの共通点を発見することができる。それは、同じ事件、所謂「破船」事件をモデルとしているためであり、それら三人が描いた三つの小説が共通点を持つことから、また、当時の新聞報道などと比較する事によって、それぞれの小説がある程度迄は事実即して描かれているのだろうと推測することができる。前田愛^五も、「破船」が通俗小説の形をかりた私小説として、ほとんど虚構をまじえず事実のままの形で書き上げられる」と述べ、「そのことは菊池の『友と友の間』や松岡の『憂鬱な愛人』とつき合わせてみることによって明らかである」としている。

しかし、これら三つの作品をつき合わせて読むとき、明らかにするのは共通点だけではない。神崎清『名作とそのモデル^五』は、「一つの事実が、立場をことにし、利害をことにする二人の作家の主観や記憶をとおして再構成されるときに、必ずといっていいほどおこってくる食いちがいについて指摘してみたのである」と、「破船」と「憂鬱な愛人」の食いちがいについて指摘している。神崎は同書において食いちがいの具体例をあげた上で、「破船」について、「松岡の『憂鬱な愛人』や菊池の『友と友の間』と讀みくらべてみるとはだかの事実というには、あまりにも主観的で、哀訴的な文字にぬ

れていることに気がつく」と述べ、事実というには久米の主観が入り過ぎていることを指摘し、さらに「憂鬱な愛人」についても、「對抗意識にとらわれたこの小説」として、松岡の久米に対する對抗意識が入りこんでいることを示唆している。確かに、「破船」と「憂鬱な愛人」はそれぞれ、恋愛における勝者と敗者という立場上、それぞれの自己弁護や相手に対する非難が大きく、そのために誇張、あるいは創作されたらしき痕跡を多く発見することができる。では、「破船」事件において、勝者でもなければ敗者でもない、第三者としてこの事件を小説にした菊池の「友と友の間」はどうなのだろうか。先行研究では、「はじめに」で述べた通り、菊池が両者に対して公平な見方をしていることを言われるのみで、「友と友の間」における「破船」や「憂鬱な愛人」との食い違いや、「友と友の間」に入っている菊池の意図などは全くと言ってよいほど触れられていない。公平な見方をしているとされているこの作は、事実と言っているのだろうか。その後書かれた文章などと見比べてみると、全てが事実とは言い切れないようである。^{五五}

また、菊池の他の作、特に友人について踏み込んで描いている作品について、菊池自身が伸べている文章を確認してみる。「半自叙伝^{五六}」で、菊池は「無名作家の日記」について、以下のように述べている。

つまり、「無名作家の日記」は、小説であるだけに、かなり違っているのだ、その当時芥川や久米に対し、僕が隔意があったわ

けではないのである。「無名作家の日記」を「中央公論」にのせるとき、亡き滝田氏が「芥川さんに悪くありませんか、大丈夫ですか」と言って念を押した。しかし、それは滝田氏の老婆心で、僕らの間には、あの作品から、刺戟を受けるような、感情のわだかまりは少しもなかった。

また、神崎清『名作とそのモデル』においては、「後年の菊池は、周囲の文壇青年から、こうしたモデル問題を持ちだされるたびに、「嘘だよ、嘘だよ。小説だよ。信じられちゃ困る」と、頭から否定していた」という小島政二郎の証言と、「あれは、菊池としては一番誇張の多い、偽悪的な作品で、あのなかに描かれたような事實が、けつしてあつたわけではない」と、ハツキリ断言している」と久米の証言を紹介し、「この二人の証言を待つまでもなく、たしかに『無名作家の日記』は、菊池の小説であり、創作である」としている。さらに、菊池は「続・半自叙伝^{五七}」において、自身も「神の如く弱し」で描いた「良友悪友」事件について、「これは、酒好きの久米が文壇的飲み友達を作ったという程度のこと、感情的にたいした疎隔があつたわけでもない」と、久米と菊池や芥川との不和を否定している。

「半自叙伝」や「続・半自叙伝」は、かなり後年に書かれたものであり、執筆当時を振り返って、現在の久米や自殺した芥川に対する配慮のためにかつての不和や感情の疎隔を否定した面もあるだろう。しかし、菊池が自身について、特に文壇にいる友人につい

て書く時、あくまで創作としていたことは確かである。では、久米や松岡についてかなり踏み込んで描いたはずの「友と友の間」については何と述べているか。確認してみると、「この武島町の家で、失恋してその悲しみを訴えに来た久米と、偶然やつて来た松岡とがぶつかったりした。その間の詳細は「友と友の間」に書いてある」（半自叙伝）、「私は「藤十郎の恋」について「友と友の間」を、大阪毎日に書いた。これも、夕刊の小説で、久米の失恋事件を扱ったものである」（「続」半自叙伝）と、書かれているのはただそれだけなのである。『中央公論』に掲載され、自身が文壇に出るきっかけともなった「無名作家の日記」や、久米の「良友悪友」と菊池の「神の如く弱し」が共に多くの反響を得た「良友悪友」事件と比べて、ただ新聞に連載し、特に同時代評も書かれなかった「友と友の間」についての記述が少ないのは当然だとしても、あくまで創作だと断るたつた一言も書かれていない。むしろ、久米と松岡が菊池の家で鉢合わせになったことが事実であり、「その間の詳細」として「友と友の間」を上げていることから、この作品がかなり事実 に即して書いてあると言っているようにも見える。

事件の真相はどうであったのか。新聞報道がなされていないプライベートな出来事や会話がどうであったのかは確認する術がなく、何が事実であったと特定することは難しい。だが、「友と友の間」と「破船」、「憂鬱な愛人」の二作を比較することで、「友と友の間」と二作との食い違いを発見し、「友と友の間」に入りこんでいるであろう菊池の意図を考察する材料とすることはできるはずである。

この章では、「友と友の間」と二作、特に「破船」とを比較して、明らかにになった食い違いから、特に気になるところを見て行きたい。

二二 食い違い（二）―夏目一家の写真―

まず「友と友の間」と「破船」において食い違いを見せているのは、夏目一家の写真が久米が菊池に頼んで手に入れてもらう場面である。この場面は、漱石の死後、夏目家に入り込むようになった久米が、時事新報の写真師が公園を歩いていた夏目一家の写真を夏目一家だと気づかぬまま秋の景物として撮り新聞に載せたことを聞き、時事新報に勤めていた菊池にその写真を焼いてもらえよう頼むというもので、「友と友の間」、「破船」、「憂鬱な愛人」の三作すべてに登場する。しかし、この場面は「友と友の間」と「破船」で大きく話の流れが異なる。

「友と友の間」では、久野（久米）と雄吉（菊池）が二人で話している時に頼み、写真を手に入れた雄吉（菊池）が杉村（松岡）を誘って久野（久米）の下宿へ写真を持っていく。そこで悪戯好きの杉村（松岡）が、お金を出して買ってくれなければ写真は渡せない」と久野（久米）を揶揄い、それを聞いて腹を立てた久野（久米）を、雄吉（菊池）が宥めようとする。しかし、杉村（松岡）は久野（久米）を揶揄い続け、ついに久野（久米）は雄吉（菊池）に対し「木村も、探訪記者なんかをやり出してから、根性が汚くなったな」と言い放つ。その言葉を不快に思い、憤慨した雄吉（菊池）に、最終

的には杉村(松岡)が笑いながら「君が、狂言の裏を掻いちや駄目だよ。到頭金にしそこなつた」と写真を久野(久米)に渡す。帰り道、雄吉(菊池)はどうして杉村(松岡)があんなに写真を渡そうとしなかったのだろうと考え、もしかして杉村(松岡)も妙子さん(夏目筆子)のことが好きなのではないかと考える。

しかし、「破船」ではまず、小野(久米)が写真について池田(菊池)に頼むのは杉浦(松岡)の下宿でのことであり、その場には小野(久米)と池田(菊池)の外に杉浦(松岡)が同席している。そして、池田(菊池)は手に入れた写真を杉浦(松岡)に渡し、杉浦(松岡)はそれを小野(久米)に渡そうとせず、結局そのまま杉浦(松岡)が勝負(夏目)家の人々に写真を手渡すのである。

このように、久米が菊池に頼んだ状況、写真が夏目家にまで渡る経緯が、大きく異なっている。加えて、「友と友の間」では、「殊に、雄吉は久野を此の寫眞に依つて、いぢめたり、焦らしたりする氣は、少しもなく、たゞ杉村の發意に従つて居るばかりであるのに、久野がお門を取り違へて自分に——寫眞を持つて來たことに就て、當然感謝を受くべき筈の——自分に、喰つてかゝるのを心外に思つた。彼はもうこの上、杉村の惡戯に、従いて行く氣はなくなつた」と、あくまで久米に惡戯を仕掛けたのは松岡の独断であり、菊池にそんなつもりはなかつたと断言しているのに対し、「破船」では、まず写真について頼んだ段階で、池田(菊池)は「ぢやあ兎に角、調べて見てやらう。そして若し在つたら、そのときはお禮をタシマリ貰ふぜ。」と言つており、写真を持つていく代わりにお金をもらう趣

旨の發言を一番はじめにしたのは、菊池であるということになっている。

この場面について、「憂鬱な愛人」ではどのように描かれているのか確認してみる。「憂鬱な愛人」では、「友と友の間」や「破船」とは異なり、直接の場面は存在せず、その出来事について秋山(松岡)が小早川(芥川)に話すという仕方での場面が登場する。以下がその秋山(松岡)の台詞の引用である。

そこで僕の惡戯氣がむらむらと起つたんだ。まづ住吉に言ひ合めて、あたりだけ僕が懷に入れて、二人で三木の下宿に行つてね、どうだ、いいものをもつてるんだが買はないかといつて苛めにかかつたんだね。するとたうたう奴さん本當に怒つちまつてね、そんなものはいらない、君が勝手にするがいい、住吉も住吉で新聞記者なんかをやつてるんで、根性が曲がつて人をゆすりにかかんだらうなんかと、とんだところで飛沫をはねかへして、ベそを搔きながら怒つてる始末さ、何もこれしきのことでむきになるがものはないやね。僕も可笑しいやら氣の毒やらで、超然としてにやにやしてゐると、今度は住吉は住吉で僕がいらぬ真似をしたんでうけぬでもの惡罵を浴せられたつて文句を言ひ始めるし、三木は三木で僕のいたづらに何か底があるやうに感違ひしてぶりぶりしてゐるし、全く近頃になく愉快な喜劇だつたよ。話といふのはそれつ切りだがね、僕はこのエピソードの中にも何ものかを讀むことが出來たやうにも思つたんだ。

「憂鬱な愛人」での話の流れは「友と友の間」とほぼ同一であると言える。しかし、ここで秋山（松岡）は、悪戯の動機を、三木（久米）が本当に涼子さん（夏目筆子）に惚れているかを試すためであり、また「だつて面白いぢやないか」と、恋をしている三木（久米）を揶揄う目的であつたとして、菊池の言うように夏目筆子に惚れていたために写真を渡そうとしなかったわけではないとしている。

単に多数決的に判断するならば、この場面で創作をしているのは久米の「破船」であり、事實は「友と友の間」や「憂鬱な愛人」の方であることになるだろう。しかし、本当にそうなのだろうか。久米が「破船」において事實を脚色する動機の一つを、恋愛の勝者である松岡への悪意とするならば、責任の一端を菊池に与えるような「破船」での書き方よりは、「友と友の間」のように、松岡が独断で久米に対して悪戯を仕掛けたとした方が都合がいいはずである。「憂鬱な愛人」が言うように、「このエピソードの中にも何ものかを讀むことが出来」とすれば、その読むことができる何ものかとは何であろうか。その「何ものか」を単に久米が夏目筆子に対し惚れているという事実とすることもできるだろうが、もしその他に「このエピソードの中」から「讀むことが出来」る「何ものか」があるとすれば、それがこの食い違いを生んでいるのではないだろうか。

二二 食い違い（二）——久米の告白——

次に食い違っているのは、久米が周囲に筆子への恋を打ち明ける場面が存在するかということである。

「友と友の間」では、この場面は存在していない。作中何度も久野（久米）が思っていることがすぐ顔に出てしまう性分であることが繰り返され、「心に思つて居ることを、何うしても隠し切れない久野は、自らの新しい戀を、直ぐに皆に打ち開けてしまつた」としている。さらに前節で取り上げた写真の場面の前には「僕は、妙子さんに對して、もう少し積極的に出やうと決心したよ」と自ら恋を認め、これから積極的にアプローチしていくことを宣言している。

しかし、「破船」を見てみると、久米が周囲に對し筆子への恋を告白するシーンが重要な一場面として、写真の場面のあとに存在している。「小野はそれまで、そぶりには他人に察せられたかも知れないが、嘗て一言と雖も、冬子嬢に對する戀心を、外へ發表したことがなかつた」と、決して筆子への恋心を他言していないことを前置きし、「それを初めて打明けたのは、柳井に向つてゐた」として、柳井（芥川）に初めて自分が筆子に對して恋していることを告白する場面が描かれる。さらに言えば、久米が芥川に對して恋を打ち明けようと決断するまでについて、「小野は柳井の告白を聞き終ると、かう慰めるやうに云つたが、さう云ふとゞもに、自ら柳井の悩みと自分の煩悶とが、對照的に考へられた。そして平常決してそんな自分の失敗の告白などをして、弱い尻を友

人にでも掴まへさせたことのない柳井が、さすがに一人の胸に収めかねて、自分にかう打ち明けられたのを聞くと、自分のもつてゐる悩みをも、柳井に打ち明けないではをられないやうな、一種の衝動を心の中に感じた」と、どうして打ち明けようと思ったのかまでを丁寧に描写している。そのあとには、柳井（芥川）に恋を打ち明けてしまったことを受け、小野（久米）は、「だから小野は日常の素振りでも、それとなく仄めかしはすることがあつても、はっきり打ち明けないでゐた。そして時機を待つてゐたのだつた」としていた杉浦（松岡）に対し、筆子への恋を告白しにいくのである。

「憂鬱な愛人」を見てみると、周囲は久米の新しい恋について彼の様子から察しているものの、はっきりと久米が自身の口から筆子への恋心が打ち明けられたと思われる場面は、写真の件のあとに別に存在する。秋山（松岡）と小早川（芥川）が話している場面で、小早川（芥川）が三木（久米）や涼子（筆子）に何か変わったところはないかと尋ね、その後以下のように続ける。

「實はこの二つを結びつけて問題にしたいんだがね。三木の奴涼子さんに大分參つてゐるらしいが、涼子さんの方はどうなんだらう。」

「そんなこと君に打ち明けたんか、此の間、彼奴も根が惚れつぽいだけに、そんな戦術は心得たもので、中々敵本主義をやり居るな。」

秋山は例のどほり皮肉を言ひながらも、自然きつと眞顔になつた。小早川も鋭く畳みかけて來た。

「敵本主義つて何のこつたい。」

「此の間君の評判が出たら、早速むきになつて君にフィアンセのあることをささも一大事のやうに奥さんたちの前で曝露したさうだが、こん度は危いと思つたのか、まづ君に打ち明けたと來たね。」

ここで「まづ君に打ち明けた」とあるように、「憂鬱な愛人」でも、打ち明けるまでの経緯は異なるものの、久米が真つ先に恋を打ち明けた相手は芥川である。

こうして三つの作品を並べみると、今度は「友と友の間」だけが他二作と食い違つてゐることがわかる。何故、食い違つてゐるのか。菊池が芥川と久米のやり取りを知らなかっただけとは考えにくい。そこで注目したいのは、「憂鬱な愛人」で言うところの「敵本主義」だ。「敵本主義」とは作中で秋山（松岡）が説明した通り、筆子の媚候補として芥川の名前が挙がつた時に、三木（久米）が小早川（芥川）のフィアンセのことを話し、それを阻止しようとしたと言ふ一件のことである。芥川が筆子の媚候補に挙げられていた件については「破船」でも触れられ、また久米は「和霊」においてその事情を詳しく述べている。

芥川が最初の媚候補であつたことは、「友と友の間」連載終了後ではあつたが、既に久米の失恋物に於いて紹介され、周知のこと

であった。加えて言えば、「友と友の間」連載開始前、久米の失恋物で触れられる以前から、新聞報道において芥川のことを読者に周知されていたものと考えられる。久米の失恋について初めて詳細に報道された「◇婿君は…漱石氏の愛嬢 好事魔多しと…久米君 ◇先輩の門弟諸君が ◇敦園荒きおつとり刀」と題する『東京日日新聞』の記事には、「芥川龍之助氏も一時嘔目の的となつたが氏には既に妻たるべき人がある」と、はつきりと芥川が一時筆子の婿候補であつたことが書かれている。

新聞報道までされ、一般に知られていたと思われる芥川が婿候補であつた事実だが、「友と友の間」においてはこの事実は一切触れられていない。その代わりに、久野（久米）が一番最初に直面した恋愛の問題として、全く別の問題が紹介されている。以下は「友と友の間」の久野（久米）の台詞である。

「が、何ちらにしろ、幾何戀したつて、とても成功は覺束ないんだ。何でも、奥さんは、文學士には娘を與らないと云つて居るさうだから、とても駄目らしい。それに、此の頃時々かゝつて来る縁談の口などを聞いて見ると、がっかりする程、いゝ所から来るらしいからねえ」

その後、夫人が考えを変え、婿は文學者でも構わないと言つのであるが、こうした鏡子が文學者を婿候補から除外するような発言をしたという描写は、「友と友の間」以外には見られない。芥川

が婿候補とされたことの代わりに、菊池が創作したのではないという可能性も考えられる。菊池が「友と友の間」で故意的に芥川の婿候補とされていた事実を描かなかつたとすれば、久米が芥川に対して初めに恋を打ち明けたとされる場面が全く出てこないことも、故意的に起こされたこととは考えられないだろうか。何故、菊池が久米が恋を告白する場面を描かなかつたのかは、三章一節で考察することとする。

二二三 食い違い(三)(四)——松岡からの葉書と二つの劇場——

一節と二節で挙げた食い違いの外に二つ、食い違いを見ておきたい。

久米が鏡子から筆子との婚約の約束を取り付けた後、松岡が葉書を残して姿をくらますのだが、その場面においても「友と友の間」、「破船」、「憂鬱な愛人」は食い違っている。

「友と友の間」では、雄吉（菊池）は杉村（松岡）から一通の手紙を受け取る。「それは、いつものやうに、簡単な用事書いたハガキではなかつた」と、わざわざ葉書ではなく手紙であつたことを強調している。手紙の一部を「友と友の間」から引用する。

拝啓。

僕は、いろ／＼なことが、嫌になつたから、暫らく東京を去らうと思つて居る。雑誌×××の編輯は、スツカリ君に頼む。

(中略)

木村雄吉様

杉村 淳

この手紙を読んで雄吉(菊池)は不快に思うと同時に不安になり、久野(久米)の元を訪ねる。そこで久野(久米)は夫人とこのことを雄吉(菊池)に話すのだが、そこで久野(久米)は

「あゝ、君の所へも、そんな手紙をやつたのかい」と言い、杉村(松岡)の様子がおかしかったことと、下宿を訪ねたが旅行へ行つていていないと言われたことを告げる。

「破船」での経緯は異なっている。まず、小野(久米)が杉浦(松岡)からの「可なり慌しい亂れた文字で、墨色のかすれた一葉の葉書」を自分の下宿の机の上に発見する。その文面は、「少し頭の工合が悪いから、これから旅に出かける。雑誌の用はやつて居られない。君が宜しくやつてくれ」というものだ。その文面を見て、小野(久米)は杉浦(松岡)が自殺するのではないかと思つて不安になり、杉浦(松岡)の下宿へ向い、そのうち池田(菊池)を「新聞社(時事新報社)」を訪ねる。そこで、「君の所へは杉浦から、何か知らせはなかつたかい」と尋ねると、池田(菊池)は「杉浦の所から? 杉浦がどうかしたのか」と答える。この時の池田(菊池)の台詞と、その後小野(久米)に届いた葉書を見る場面から考えるに、「破船」では松岡からの葉書を受け取つたのは久米であり、少なくとも訪ねて行つたときには菊池はその知ら

せを受け取っていないようである。

では、手紙を実際に送つた側であるはずの松岡の「憂鬱な愛人」はどうか、確認してみる。「憂鬱な愛人」では、旅に出る前に上野駅前の郵便局から住吉(菊池)と下宿の小母さんに葉書を送る場面が出て来る。以下は「憂鬱な愛人」からの引用である。

彼は何故ともなくフフンと嗤ふやうに呟いて停車場を出た。さうして驛前の郵便局に駆け込んだ。

電報が速達かと思つたが、考へてみればどちらも大形なので、わざと何の事もないやうに手輕に葉書を買つた。さうして備へつけのちび筆を氣にしながら、一枚を住吉に、一枚を下宿の小母さんに宛てて書いた。

住吉へはぶつきら棒に、近來何も面白くないから、しばらく旅に出てみる氣持になつた。雑誌のことなど萬事よろしく頼む。上野驛にてと書いて、時刻を入れようと思つて局の時計を見ると、やがて九時半であつた。

久米ではなく菊池に葉書を送っていることと、その内容については「友と友の間」と一致する。「上野驛にて」と「時刻」については菊池が省略したとしても不自然ではないだろう。また、「憂鬱な愛人」では、「三木へは書く氣がしなかつた」と、このタイミングでは久米に葉書を書いていないことがわかる。「破船」と食い違

っていることは確かだが、しかし、「友と友の間」とも食い違いがあるのである。それは、松岡が送ったのが「葉書」であることだ。「友と友の間」で「簡単な用事を書いたハガキ」ではなく手紙で来たことが強調されているのに対し、「憂鬱な愛人」では「電報か速達かと思ったが、(中略) 手紙に葉書を買った」と「手紙に葉書」であることが強調されている。手紙の内容が殆ど一致していることを見るに、菊池は松岡から届いた手紙(葉書)が手元にあった可能性もあり、松岡も自分が書いた手紙(葉書)を覚えていないとも考えにくいことから、単にどちらかの記憶違いで片づけてしまうことは難しい。

もう一つ、「友と友の間」と「破船」にある食い違いを見ておく。それは、「友と友の間」で登場する二つの劇場についてである。

一つ目の劇場は、久米が鏡子から婚約の承諾を得た劇場である。「友と友の間」では、久野(久米)は、雄吉(菊池)に対し、「いや、實は一昨日の晩、僕と杉村と松本の奥さんと三人で、帝劇へ長唄の大會を聴きに行つたんだ」と話しているが、「破船」では、同じく小野(久米)が池田(菊池)に対し、「實はね。昨日杉浦と一緒に、勝見夫人を連れてローヤル館へ行つたんだがね」と話している。

二つ目の劇場は、久米の戯曲が上演され、久米や筆子、菊池が観劇した劇場だ。「友と友の間」では、「その幸福の最高頂は、久野の戯曲が、帝劇で上演された時だったらう。それは、新しい劇

団に依つて催された二日丈の試演的な上演」だったとしている。対して、「破船」では、「有楽座で、小野の依頼されて書いた結核豫防劇が、上演されたのもその頃だった」と言い、「それは無名會といふ、東儀一派の新劇團で、五日間有楽座に上演されることになつた」としている。

一つ目の劇場については、菊池は久米から話を聞いただけであるから、記憶違いということも考えられるだろう。しかし、二つ目の劇場については、菊池は久米に招かれて二日目に観劇している。さらに、「友と友の間」では「若い作家の努力が、帝劇と云ふ日本で一番立派な劇場の脚光を、浴びると云ふことは何と云ふ晴々しい事だったらう」と、「帝劇と云ふ日本で一番立派な劇場」であつたことが強調されている。この時期、久米や芥川と比べて出遅れていた菊池からすれば、友人の作品が例え二日とはいえず上演されそれを見に行ったことは、かなり印象的な出来事だったはずである。では「破船」の方が誤りであるかと言えば、自分の書いた作品が上演されるという晴れ舞台のことを久米が覚えていないとは考えにくく、加えて「破船」では上演の経緯についてかなり詳細に描かれている。こちらもまた、単にどちらかの記憶違いと片付けてしまうことは難しいのである。

以上のように、「友と友の間」には、記憶違いとも脚色とも判断できない食い違いが存在している。

二一四 不自然な重なり合い

こゝまで「友と友の間」の食い違いについて見て来た。本節では、反対に、「友と友の間」が「破船」や「憂鬱な愛人」と重なり合っている箇所について見ていきたい。

先にも述べた通り、同じ事件をモデルとしているため、これら三つの作品には共通する点が多く存在する。しかし、会話文の詳細や、心境、描写の仕方などは作者が異なっているため、当然違っている。にもかかわらず、三つの作品には不自然なほど重なり合い、発表順から考えるに久米や松岡が「友と友の間」を踏まえて書いたと考えられる箇所——あるいは、「破船」の構想が先だったとすれば、「破船」構想を踏まえて書いたと考えられる箇所——が存在しているのだ。

まず、久米の惚れっぽさについての描写である。久米の恋愛体質については現代においても伝わっているイメージの一つであるが、その惚れっぽさについての描写を三つの作品から以下に引用する。

「俺は、何時でも誰かしら異性を戀して居る。現在自分の接觸する女性の中で、一番美しい女を戀して居る。俺は、一時でも誰かを戀せずには居られない」と、自分自身で、時々述懐してゐる程、久野は多くの女性を戀して來た。が、その戀は、ドンファンが、一人の女から一人の女へと、戀の巡禮を續けて行つたやうな、軽佻な浮すべりのした戀ではなかつた。彼のどの戀

も、どの戀も真面目であり、本心からのものであつた。が、彼のどの戀も、酬ゐられたものはなかつた。（菊池寛「友と友の間」）

「だつて君は、君の接してゐる範圍の異性の中で、一番美しいものに必ず惚れて居ると云ふ主義ぢやないか。惚れてゐなければ淋しいと云ふ主義ぢやないか。」

「それや俺だつて、自分でも惚れっぽい質だとは思つてゐるし、冗談にそんな事を云つたかも知れんが、決してそんなことがあるものか。そんなことを云やあ何にもないのはどうしたものなんだい。そんな戀愛主義なんぞ持つちやゐない證據ぢやないか。」（久米正雄「破船」）

實際三木は自分でも認めてゐるやうに惚れっぽい質であつた。よく小早川などに、身邊に居る女性のうちで、一番美しいのにいつもラヴすることにしてゐるのであらうなどと嘲弄されても、かへす言葉もない位に、この一二年の間次々に誰かしら人を戀してゐた。尤も戀と言つたとて、極めて淡い交渉に過ぎないので、ただ自分から思ひつめて胸を躍らせてるばかりであつて、いつも相手の冷静な最後の一言で儚くも失戀に終るやうな片思ひの戀情であつた。（松岡譲「憂鬱な愛人」）

並べてみれば明らかなように、三つの作品すべてにおいて、自

分の述懐、杉浦（松岡）の台詞、小早川（芥川）の台詞の回想と、出て来る仕方は変わっても、接している女性の中で一番美しい女に恋をしているという殆ど同じ文句で、その惚れつぽさは描写されている。

久米の恋愛について小谷野敦『久米正雄伝——微苦笑の人』を参照してみると、「破船」事件より前の久米の恋愛として、中条ユリ、後の宮本百合子との恋愛が挙げられており、また、百合子との恋愛について、久米は大正七年十一月に『新小説』に「彼女と私」とする小説を書いている。しかし、百合子の外見について

「宮本百合子が美人でないのはよく知られている。特に中年以降の、でっぷりと太り髪を短くした、流布している写真は、美とはほど遠い。少女時代でさえ、美しくはない」とした上で、「久米は、少なくとも若い頃までは、良家の娘に魅惑を感じる傾きがあり、容貌よりも家柄に魅かれたことは、「破船」事件でも分かる」と小谷野は述べている。たしかに、「友と友の間」においても妙子（筆子）の容貌について、「一番上のお嬢さんは、顔立は整つて居ないが」と久野（久米）に語らせ、美人ではないと断言している。江口には「面白いことにはあの題材をかくたびごとに、いやかきなおすたびごとに、女主人公が一だん一だんと美人にかきかえられていくことだった。そして、「破船」にいたつてその女主人公は美人の絶頂に達した」と言われている「破船」ですら、「どう眼の覚める程美しいとか綺麗だとかいふ程ではないが、何となく清々しい、しつとりと整つた十人並の顔」として、筆子を美人だ

とはしていない。では、「友と友の間」で言う「現在自分の接觸する女性の中で、一番美しい女を戀して居る」という台詞はどこから来ているのだろうか。

同じく『久米正雄伝』を確認してみると、「破船」事件より前、久米は遊郭通いの外に何人か恋人がいたようだが、久米が恋をしていたらしい女性の中ではつきりと美人だろうと分かるのは木下八百子という女優くらいしか見当たらない。八百子は既婚の上に子供までいたが、山本有三と恋仲になり、その山本と喧嘩をした際の面当てとして久米に近づいたという。だが、久米が八百子に出会った頃、山本の日記から判断するに久米には別の恋人がいたのではないかとされている。身近の女性の中で一番美しい女に恋をしているという久米に対する表現が「友と友の間」以前にも使われていたもののかについては確認が取れていないが、一体いつから、そして何を根拠に久米にそうしたイメージが出来たのかは判然としない。

次に、久米が松岡に対して筆子に恋していないことを確認する場面において登場する描写について見てみる。久米が筆子に恋をするにあたって、松岡に対し筆子に惚れていないことをしつこく確認するのだが、それにまつわる描写を「友と友の間」と「破船」から引用する。

「さうだ、松本さんの「その後」のやうになると大變だ」と、雄吉も相槌を打った。

「その後」は、松本さんの作品の中でも、傑出した作の一つであった。心の奥深く戀して居た女を、ふとした友情的興奮から、友人に譲つて、自己犠牲の偽りの満足に、快々として數年を過したが、偶然の邂逅に、道德的虚偽の假面を脱ぎ捨て、友人の手からその女を奪ひ還すと云ふ筋であつた。

「いや「その後」のやうになるのなら、まだいゝが、先生の「魂」のやうになると、大變だからね」と、久野が云つた。

「魂」の筋は、友達同志が、美しい友人の假面を、被ながら、一人の女を奪ひ合つて、敗れた方が、自殺をする^{と云ふ}、その後」よりも、もつと深刻な作品であつた。(菊池寛「友と友の間」)

「それやあ盡力はするがね。盡力して、君たちを一緒に置いていて、先生の『そのうち』にある臺輔のやうになると困るからなア。」

その主人公は、自分の盡力で二人を結婚させて置いて、そしてその後、その女に戀をしてゐたのを知り、かつ現在の餘り幸福でない境遇に同情して、自分が盡力して一緒にしてやつた良人から、その女を奪ふことになるに至る。……先生の小説の中でも、最傑作のものだつた。

「そんなことになつちや大變だ。」(久米正雄「破船」)

こゝで注目したいのは、「友と友の間」では「その後」すなわち

夏目漱石の「それから」^{六〇}を例に出すのは雄吉(菊池)であるのに対し、「破船」では杉浦(松岡)である点である。どちらが事実だとしても食い違い、どちらとも創作である可能性すらある。一方、「憂鬱な愛人」では具体的な作品名をあげて久米と松岡と筆子の三角關係を危惧する場面はないものの、久米の失恋後において「秋山は自分自身、いつの間にかやう疎石の小説に出て来る人物に完全になつて居るのを見出してぞつとした。わづかにそれらの主人公とはいさゝか別の途を歩きたいものだと思ひける位のものでつた」として、「友と友の間」や「破船」よりも踏み込んで、漱石作品のようになるのを危惧するのではなく、もうすでに自分がいつの間にか「疎石の小説に出て来る人物に完全になつて居」たことに氣付き「ぞつとした」のである。この重なり合いについては、第三章一節においてさらに考察する。

さらに、菊池が自身の結婚を報告する場面についてだ。事実、菊池は久米や松岡の恋愛事件が起きている最中に結婚している。その結婚を、田舎に帰る前に友人に対して報告するのだが、「友と友の間」と「破船」には菊池が久米に対して報告する場面として、「憂鬱な愛人」には菊池が松岡に対して報告する場面として登場する。久米や松岡の恋愛と一見あまり関わりのない菊池の結婚について一場面を設けているという重なるの外に、「友と友の間」、「破船」での会話と、「憂鬱な愛人」での会話は全く別の場面であるはずにもかかわらず、これらの場面において不自然な重なり合いが存在している。菊池が結婚を報告した後、菊池と久米の

会話は、久米が、「並河も許嫁が定まつて居るし、君は直ぐ結婚だし、君達は皆幸福だな」(菊池寛「友と友の間」)、「さうかねえ。すると杉浦のことでもなければア、世はおしなべて春なんだね」(久米正雄「破船」と言うのに対し、本来別の場面であるはずの「憂鬱な愛人」において、秋山(松岡)は「おやおや、君迄がラヴしてるんか。全く世の中は春だね」と、「破船」の小野(久米)と殆ど同じ台詞を言うのである。

加えて、「破船」において、その「破船」という題をなぞるような柳井(芥川)の「小野。ほんとに君は氣を付けろよ。學校を出て、だん／＼さう云ふ周圍に接するやうになると君が一番先に難破しさうだ。何處か君の血色のいゝ顔には、温いが何となく戀の殉教者と云つたやうな、妙に陰影が備はつてゐるからな」という台詞があるのだが、「戀の殉教者」という表現で久米を呼ぶ場面が、「久野は、虐げられた戀愛の殉教者のやうな心持で、流人のやうに二三年を上方で暮さうとするのだらう、そして失戀の悲哀をしま／＼と味はうとするのだらうと思つた」として「友と友の間」にも存在している。

久米が「破船」を書く時、単に自身のこれまでの失戀物の延長としてだけではなく、菊池の「友と友の間」を意識し、松岡もまた「憂鬱な愛人」を書く際に「破船」への抗議としてだけではなく「友と友の間」をも意識していたことが、食い違いや重なり合ひを見ることが見えてくる。また、それぞれの作中に込めた意図によつて食い違つてはいるだけではなく、三人が敢えて食い違

せ、敢えて不自然に重ね合わせることで、何度も繰り返し同じ題材を描きつつも、読者に何が真実なのか掴ませず、飽きさせない試みをしてはいたのではないかとすら考えられるのである。

三 夏目漱石との関わりから見る「友と友の間」

「友と友の間」を読む上で欠かすことができないのが、夏目漱石の存在だ。そのことは、大正八年八月一日に掲載された第一回到、明らかに夏目漱石と思われる肖像画が挿絵として添えられていることから明らかである。

本章では、「友と友の間」における夏目漱石と菊池寛との関わり、そしてその前提として漱石神話と菊池を含む第四次『新潮』同人との関わりを見ていきたい。

三一 漱石神話と第四次『新潮』同人

漱石神話とは、「いわゆる修善寺の大患以降の漱石を神話化し、大患以降の作品から初期、中期の作品を照射することを通して、漱石の文業全体を、「則天去私」の境地に至る人格形成の物語としてとらえる^{六)}」ものだ。漱石神話を作り上げた人間としてまず名前が挙げられるのが小宮豊隆である。大山英樹^{六)}によれば、小宮が書いた漱石「の伝記『夏目漱石』及び作品論『漱石の芸術』で語られるのが、一般に「則天去私」神話といわれる漱石の悟達に

至る物語であ」り、「こころした漱石の精神性に関する考察が、小宮の漱石伝の発表によって活性化されたのが一九四〇年代の漱石研究の場であったといえる」として、漱石神話とその神話に基づく研究が盛り上がったのは一九四〇年代であったという。それ以前の漱石神話ほどのようなものであったか。久米の「破船」を見れば、「破船」が連載された大正十一年には漱石神話がある程度完成していたであろうことは明らかだ。

彼らが先生と云つてゐるのは、當時の文壇からは退いてゐるが、その特別の關係ある新聞へ、次ぎ次ぎに大作を発表して、益々堅實老熟な筆致を以て、紅葉歿後の文豪と稱され、數多の門弟に取り捲かれて隠然たる一大勢力をなしてゐる、勝見漾石氏の事であつた。(中略) 小野とても亦、先生からは可なり認められ、激勵を受けてゐた一人だつた。(中略) 先生も必ず、何より先に彼らの貧しい創作を讀んで、有益な批評を聞かして呉れる事になつてゐた。加ふるに、先生は其頃に至つて、所謂『則天去私』の文學觀を抱くに及び、前よりも一層熱心に、其門へ集る若い人たちに、説話して聞かす例になつてゐた。

右は、「破船」からの引用である。漾石(漱石)の偉大さと、自分とその偉大な人物と近しかったこと、加えて「所謂『則天去私』の文學觀」が、はつきりと明示されている。

また、久米が「破船」において夏目漱石を利用しようとしてい

ることについては既に日比嘉高^三によつて「破船」において久米は、二重の意味で漱石を利用しようとしている。一つには、自身自身の文壇史的配置図として。もう一つには漱石人氣のゴシップ的、のぞき見の利用として。漱石の死を描くということは、当然、その系列に弟子としてつながらる自分自身を描くことになる。「破船」は漱石の死という文壇史的な出来事を描き、同時に作者自身の文壇的出自と明らかにするという役割を果たしていたのである」と指摘されている。

では、それよりも更に前、「友と友の間」が連載された頃の漱石神話の状況について考えるために、漱石神話の生成について見ていく。

山本芳明^{六四}は、江口渙や狐蓬生の「漱石の「偉大」さを強調」する「感動」を挙げた上で、以下のように述べている。

しかし、一方で、彼等が、江口流に言えば、漱石が「蒼く静かに澄み切つた深い偉き魂の世界」を持つてゐることを、頭から信じ込んで作品を評価していたことも否めない。この頃、漱石には、「慈悲と愛」に満ち「人を懷しめ、人を崇服せしめる慈悲と徳」を持った「総てのものゝ『父』」(B N 生「訪問記 其七 ▼夏目漱石氏」「新潮」大2・10)といったイメージが生まれていた。恐らく、彼等は、そうした漱石のイメージを自明のこととして取り入れていたのではなからうか。彼らの発言には希望的観測まじりの賛美をいささか過剰に述べて、自らの言

葉に陶酔しているという面もある。(中略)しかし、やがて、彼等の言説は、漱石が「一個の偉大な人」であることを核にした『漱石神話』の生成の基礎となっていた。

漱石が亡くなるよりも前、大正三年頃には「漱石神話」生成の基礎^六ができていたという。さらに山本は、「漱石に死を契機として若い世代を中心に「漱石崇拜熱」が文壇を席卷していった」とについても指摘し、「漱石の死後、漱石を「私淑せる文士」とする「文芸愛好家」の数が急激に伸びている」と述べた。

「友と友の間」が書かれた大正八年頃には既に、漱石を偉大だとする言説は多く見られたようである。加えて、『漱石辞典』「赤木柝平」の項^{六五}によれば、赤木が大正七年に刊行した『夏目漱石^{六六}』について、「その後、陰に陽に漱石の評価を左右する「則天去私」の神話の端緒が、こうした言説において形成されたことを示している」としており、このことから「友と友の間」連載時には漱石神話ができかかっていたことがわかる。

では、そのできかかっていた漱石神話に、久米や松岡などの第四次『新思潮』同人はどのように関わっていたのだろうか。

漱石が亡くなった後、大正六年三月に漱石先生追慕号と題した『新思潮』が発行された。江口渙『わが文学半生記』によれば、「それまでの「新思潮」は五〇〇部しかならず、それも一〇〇部もうれなかった。ところがその号は思いきって八〇〇部すったのがたちまちうりきれた」という。また、杉田智美^{六七}は、この号の

『新思潮』について、「一方で木曜会に集まった鈴木三重吉や松根東洋城、森田草平や小宮豊隆ら先輩筋に対しては、巻頭近くには彼らと漱石とのつながりを示す書簡やエッセイを置いて顔を立ててみいる」とし、「この時点で、文壇での彼ら新思潮メンバーの地位を考えれば、彼ら若き書き手より、ずっと長い間漱石との交流を深めてきた彼ら年長組の名前を借りてこそ、(漱石追慕号)が体をなすものであったことは想像に難くない」と、その時点では第四次『新思潮』同人たちの漱石山房内での地位は低かったことを述べ、その上で「一方漱石の「取り巻き」ではなかった作家たちに対しては、晩年側近くに過ごした自分たちの特権的立場を主張しながら「真の漱石」像を立ち上げていく事態を促したといえよう」としている。さらに杉田は、漱石の死をめぐる文章について、以下のようにも述べている。

『新思潮』メンバーの漱石の臨終についての言説を見ていると、そこには近しい間柄でありながら、周囲が自分の心情とはほど遠いことをそれぞれが競って書き記し、そして自分こそが、漱石に対して「真の」敬愛と哀悼の情を持つ人間であることが看取されるのである。これもまた嫉妬をめぐる物語であろう。

第四次『新思潮』同人たちは、競って「真の」漱石を理解していること、また、自分と漱石の近しさを示そうとし、加えて、大

山によれば、「則天去私」についても久米や松岡は語っており、ただ漱石神話を利用するだけでなく、その生成にも加担していた。

しかし、杉田の言う「新思潮メンバー」の中に、菊池は入っているのだろうか。漱石先生追慕号には、菊池も「漱石先生と我等^{六九}」という文章を載せている。だが、その文章は菊池がはじめて木曜会に出席したときの思い出を語ったものであり、漱石の死については触れられていない。「漱石山脈」^{七〇}事典^{七〇}においても「新思潮派」を「漱石山脈」として紹介しながら、「菊池寛は当時京都にいたこともあって、やや距離を置いている」とし、「菊池寛」の項目においても、「菊池の漱石への関わり方は、いわば斜のそれといえよう」と述べ、芥川や久米が「漱石訪問を繰り返していた折も、京都大学で孤独な生活をしていた菊池はそれを羨むのみであった」と漱石との関わりを半ば否定し、唯一の漱石と菊池の関わりとしてはじめて漱石山房を訪れたことを「友と友の間」から引用するのみである。菊池が漱石をどのように見ていたのか、「斜のそれ」を、「友と友の間」から見てみたい。

たしかに、「友と友の間」では、松本さん（漱石）の病状を心配する久野（久米）^{七二}が、「僕達の爲にも、日本の文壇の爲にも大損失だからな。先生は、今の日本にかけ替のない人だからな」と言ったことに対し、「ある程度迄の誠實を感ずると共に、ある程度迄の詠嘆的な誇張をも感じ」、「妙な反感から雄吉は一寸相槌を打つ氣にはなれなかつた」とした上で、「損失には違ひない。が、か

け替のない程の大損失だらうか」と言い返し、漱石が「今の日本にかけ替のない人」であることに疑問を呈している。久野（久米）に「大損失だとも。先生が死んで見たまへ「光と影」のやうな大作を書くやうな人が、外に一人でも居るだらうか」と言い返されても、「光と影」（「明暗^{七三}」）について「技巧の上の大手腕には、敬意を拂はずには居られなかつた」としつつも、「然しその小説の中に描かれて居る世界は、本質的な點に於ては雄吉と、殆ど何の交渉もない世界であつた」として、「松本さんの作品に、九分通迄は随いて行けた。が、最後の一分の處で、堪能し切れないある物足らなさを感じた」と、久野（久米）の言うようには松本さん（漱石）とその作品を認められずにいる。さらに、漱石の死床を漱石周囲の人々が「神聖な嚴肅な」場と扱っていることを繰り返し、自身を「エルザレムを讀す異教徒」と例えている。こうした記述からは、菊池の「斜のそれ」が現れていると言えるだろう。また、「憂鬱な愛人」においても、「友と友の間」と同様に、以下のように住吉（菊池）とそれ以外の同人との疎石（漱石）に対する温度差が述べられている。

一體住吉はもともと疎石の作品には無感激で、ただ其の完成された技巧の一點のみを認めてゐるやな口吻をよく洩らす男であつた。勿論それには彼の功利的な思想と、近頃戯曲ばかり書いて小説の領土に疎いのとが大きな原因をなして居るであらうが、それよりも三年の間異質の文化の空氣を吸つたことが彼を

全くよそよそしいものにしてゐた爲めであつた。彼は他の友人たちが『明暗』を中心に形造つてゐる堅い心の團結に、或る壓迫を感じて反感をさへ持つてゐたのは争はれないことであつた。それを秋山たちは住吉の偏見だと信じてゐた。住吉は住吉で彼等の疎石崇拜を盲従だと嗤つてゐるらしかつた。

さらに、菊池自身も後年「続」半自叙伝において、「私は昔から漱石の作品が嫌いではないまでも、尊敬は出来なかつた。同僚の芥川や久米が崇拜するのが、不思議でならなかつた。芥川などは、本気であんなに認めていたのか訊いて見たかつたくらいである」として、漱石を他の同人のように「尊敬は出来なかつた」ことを認めている。

漱石について、他の同人とは異なり、斜に見ていた菊池だが、「友と友の間」には菊池の「斜のそれ」しか現れていないとしてしまつていいだろうか。他の第四次『新思潮』同人と同じく、漱石の偉大さが描写され、自身と漱石との近さが主張されていたのではないか。菊池と漱石との関係については次節で触れることとし、ここでは「友と友の間」から見る事のできる漱石を偉大だとする描写、所謂漱石神話が表れている箇所を見ることとする。

雄吉(菊池)がはじめて金曜会(木曜会)に出た場面において、菊池は松本さん(漱石)について、「初対面の雄吉に對しても、何の腹藏もなくズバリと突込んで来る松本さんの眞率な人間的な温味を有難く思はずには居られなかつた」、「自分の作品に對

する非難を訊きながら雄吉は松本さんの温情を、しみじみと感ぜずには居られなかつた。彼は、藻石門下と云つたやうな群が、松本さんの周圍に、自然に形作られてゆく譯が、ハッキリ判つたやうに思つた」と、その「温味」を語っている。ここには、山本の言う「漱石神話」の生成の基礎」となつた言説と通じるところがある。

さらに、先ほど引用した久野(久米)の発言に對し疑問を呈する場面においても、菊池は雄吉(菊池)の発言について「天の邪鬼的な心持から、妙にこぢれたことを云つてしまつた」と語らせ、その疑問が正しいものではなく、「天の邪鬼的な」もので、「妙にこぢれたこと」であつたことを述べている。さらに、久野(久米)の心配について以下のようにも書いている。

久野は、先生の一大事に逢つたとばかりに、懸命に心配して居た。その賢明さには、感傷性から來た誇張が伴はないでもなかつたが、雄吉もある程度迄は、久野と同じ心配に、浸つて行くことが出來た。松本藻石——それは雄吉達のやうな志望を持つて居る者に取つては、他の日本人の誰と比べても、一番大切な人に違ひなかつた。文學者として、松本藻石が存在して居る事は、文學に志して居る者、全體に取つての一つの強みだつた、一つの頼りだつた。殊に、一度でも二度でも、其人に會つて居る者に取つては、尚更さうであつた。

松本さん(漱石)について、「それは雄吉達のやうな志望を持つて居る者に取つては、他の日本人の誰と比べても、一番大切な人に違ひなかつた」と、自身で疑問を呈したはずの、松本さん(漱石)が特別な存在であることを述べるのである。さらに、この場面において、「殊に、一度でも二度でも、其人に會つて居る者に取つては」と、他の同人よりは少なくとも、自分が直に會つて居ることの特権的立場を強調している。

松本さん(漱石)の死の場面においても、その死顔を見た雄吉(菊池)は、「何かしら重々しい力に壓倒されたやうな心持になつて、心から頭を下げずには居られなかつた」としている。「斜のそれ」で漱石を見ていたはずの菊池が、漱石の偉大さを語り、漱石の亡骸の前に「心から頭を下げ」ている。

見ようによつては、漱石と近い人間がその偉大さを語るよりも、周囲の漱石崇拜に普段は疑問を呈し、「反感をさへ持つてゐる人間でさえ、直に接したことによりその人間性を賛美すると書くことにより、かえつて、漱石の偉大さを発信しているのである。

「友と友の間」と「破船」や「憂鬱な愛人」が共通して漱石神話を利用し、自分達を特権化しようとしたのではないかという箇所も存在している。

まず、二章四節で述べた、久米と松岡、筆子の三角関係を漱石作品に例えるところについて見る。

西田将哉^三は、漱石死後に漱石作品のモデル探しが過熱したこ

とを指摘し、それらのモデル探しの運動について「登場人物のモデルを指摘することによつて、一般の『坊っちゃん』読者との差異化を図り、自らを特権化するということである。漱石と直に接した経験を持つ読者の自己卓越化の運動と言つてもいい」と述べている。さらに、小宮豊隆が、自らを「三四郎^{四五}」のモデルとしているにも関わらず、一般の人々の「坊っちゃん^{七五}」のモデル探しについて苦言を呈し、その他の漱石門下生も同様に「坊っちゃん」モデル探しを批判していることについて、『坊っちゃん』以外の小説では、ある作中人物について実在の誰がモデルかということを使う場合、漱石山房の弟子たちは、山房の外部にある読者に対して優位性を持つていたはずである。しかし、『坊っちゃん』に限つてはそうではない。『坊っちゃん』は漱石の松山体験を下敷きにしてることになっており、そうであるとすれば、『坊っちゃん』の物語内容は山房の弟子たちが漱石のもとに集いはじめるより前の歴史に属するので、山房の弟子たちにとつては『坊っちゃん』を通した一般読者との差異化が不可能なのである」とし、「見方を変えれば、この構図は、漱石山房の内と外、つまり、漱石山房に集つた弟子たちと、松山時代の漱石に接した人々との、『坊っちゃん』の正統な解釈をめぐる闘争なのである」と述べている。さらに、漱石門下生の中にも「坊っちゃん」モデル探しをし出した者がいることを触れ、『漱石山房に集つた弟子たちと地方時代に漱石に接した人々との『坊っちゃん』の正統な解釈をめぐる闘争において、優位性を危うくされた漱石山房の側の、優位性を取り

戻すためのものだったのではないだろうか」としている。

漱石作品のモデルであること、またモデルを知っていることが自身を特権化させるものであったとするならば、漱石山房の先輩たちが漱石との付き合いの長さによってモデルを指摘し、自身を特権化していたのに対し、第四次『新思潮』同人は付き合いの短さからその特権に預かることができないでいたのではないだろうか。そのため、直接のモデルではないものの、久米と松岡、筆子の三角関係を漱石作品に例えることで、ある種漱石が「破船」事件を予言し、自分達を理解し、自分たちのような若者を想定して「それから」などの作品を書いたのだと主張する目的で、「友と友の間」、「破船」、「憂鬱な愛人」のそれぞれに、漱石作品に例える箇所を入れたのではないか。

自分たちを特権化しようとした試みとしてもう一つ上げておきたいのは、芥川の扱いについてである。「友と友の間」において久米の告白の場面が存在せず、芥川が最初の婿候補であった事実についても全く触れられていないことは、既に第二章一節で述べた。加えて、「友と友の間」においては、故意に芥川存在感が限りなく薄くされ、漱石死後においては、「並河は、東京に近い年にある専門学校の教授をして居た爲、松本家へは必要以外、出入をしなかつた」の一文で断り、全くと云つてよいほど登場しなくなる。「友と友の間」ほどではないものの、久米の失恋物においても、芥川を事件関係者ではなく傍観者としようとする描写が見られ、「和霊」では、「だから凡ての戦闘が終つて、勝敗が決し、すべて

傷つかない者がなかつた中に、彼一人だけは観戦してゐて、何の飛沫も受けなかつた」とし、「破船」においては、柳井（芥川）本人が、「うむ。僕は見てゐるよ。僕は永久の傍観者でありたいからね」と意味深に発言してさえる。

なぜ、特に「友と友の間」において、芥川を事件の外に位置づけねばならなかつたのか。当時の第四次『新思潮』同人における文壇出世の状況を見るならば、芥川は段違いであつた。その当時の芥川について、江口渙『わが文学半生記』は「芥川は、その頃から、いつのまにか、もうわれわれの中心になつていたのである」とし、「憂鬱な愛人」においては「疎石先生に推稱されて以来の小早川の聲名は、遙に他の新進作家を凌駕する勢で、正に一代の鬼才として文壇の視聽を集めようとしてゐた」と述べ、加えて「時々身につかない新調のフロック・コウトに山高帽などの扮装」をしているとされている。フロックコート着た芥川については「憂鬱な愛人」以外にも、「破船」や『わが文学半生記』でも触れられている。「漱石生活風俗事典⁷⁶」によれば、「一般的には、フロックを着ることはが明示的な立身出世の象徴ともみられていた」という。実際に芥川がフロックコートを着ていたからという理由もあるだろうが、それをわざわざ描写していることは芥川が既にこの頃「立身出世」していたことを示すものだろう。そうした、既に一歩先んじて出世していた芥川を事件の外に置き、その上で自分たちを特権化することによって、芥川がいなくても自分たちを特権化させることができるということを示したかったので

はないか。そしてその傾向は、芥川ほどではないものの文壇に認められていた久米や、筆子と結婚し夏目家に入ったために経済的不安のなくなった松岡と比べて、「破船」事件当時には芥川や久米と比べて文壇的に出遅れ、「友と友の間」執筆時においても文壇に出たばかりであつた菊池の方が強かつたとしても不自然ではない。

このようにして見ていくと、菊池を除いた「新思潮メンバー」でもなく、また芥川に限つてでもない、第四次『新思潮』同人全員が——当時海外にいた成瀬は除くことになつてしまふが——漱石神話の生成に携わり、また漱石を利用しようとして居たと言えるのではないだろうか。

三——夏目漱石と菊池寛

第四次『新思潮』の同人たちが夏目漱石と当時出来かかつていた漱石神話を利用しようとしていたことについては前節にて述べた。本節では、菊池寛自身が漱石をどのように利用しようとしていたのか、「友と友の間」を通して見てみる。

まず、作中で菊池と漱石の関わりとして登場するのは、菊池が初めて木曜会に出席する場面である。この時の出来事について、菊池は「友と友の間」を書くよりも前、既に「漱石先生と我等」において書いている。この文章内において、木曜会に出席することになる経緯は以下の通りである。

ところが去年京都から上京して見ると、久米や芥川は可なり夏目先生に近づいて居た。たゞ、あれほど崇拜して居た成瀬が、一度も先生に逢つて居ないのは意外であつた。成瀬は、「洋行する前に一度逢つて行くんた」と念願のやうに繰返して居た。

何でも七月の下旬で、成瀬が愈々洋行する間際になつて、同人が揃つて先生のお宅へ行く約束が出来た。自分も一度は逢つて見たいものだと思つたので、一緒に行事にした。

しかし、同じ出来事を書いているはずの「友と友の間」においては、少々経緯が異なる。「漱石先生と我等」においては、成瀬が漱石に会いたたいと言い、そのついでに菊池が同伴することになつたと書かれているが、「友と友の間」では、松本さん（漱石）が雄吉（菊池）の戯曲を読んでくれていることを知り、自分から行きたいと発言している。その場面を以下に引用する。

それを、考へると雄吉は、松本さんが、縦令間接ではあるにしても、自分の作品に一顧を與へて呉れたことを、嬉しく思はずには居られなかつた。雄吉は、初て松本さんに逢つて見ようと云ふ心持になつた。自分の作品を少しでも、賞めて呉れたことに依つて、松本さんと自分との間に何等かの機縁が開かれた

やうに、雄吉には思はれた。それは可なり自己本位的な考へ方ではあつたけれども。

「僕も、一遍松本さんの所へ行つて見ようかしら」と、雄吉は實めて呉れたから逢ひに行かうと云ふやうな現金な心持を、久野に見透かされないやうに、何氣ないやうに云つて見た。

この時漱石が誉めたとされている菊池の作品は「海の勇者」である。「新思潮」を「×××」とし、漱石の「それから」を「その後」とし、その他芥川作品などについてもタイトルを改変している「友と友の間」において、「海の勇者」は、実際の題をそのまま使っている。

さらに、引用部の冒頭、「それを、考えると雄吉は」の「それ」とは、田中博士（上田敏）が雄吉（菊池）の戯曲に一切の関心を払つてくれないという「無名作家の日記」でも語られたエピソードのことであり、ここで、自分の恩師にも顧みられることのなかつた自分の戯曲が松本さん（漱石）に読まれていることを知つて、「たゞ、松本さんが自分の脚本を読んで呉れて居ること、而もそれを、低い程度ではあるかも知れないにしろ、兎に角積極的に認めて呉れて居る事が、何よりも嬉しかつた」と喜び、雄吉（菊池）は金曜会（木曜会）に出ることを決めるのである。

こうした漱石が菊池の戯曲を読んでいるとする記述は「漱石先生と我等」には見られない。漱石死後ほぼ間をあげずに刊行された『新思潮』の漱石先生追慕号に載せた「漱石先生と我等」の執

筆時と比べて、その後、漱石の神話化が進み、「漱石先生と我等」では書かなかつた経緯について——それが創作であるのか事実であるのかははっきりしないが——「友と友の間」で描いたのではないだろうか。

ただ、ここで一つ注意しておかなければならないのは、菊池が「漱石先生と我等」で書いた木曜会出席の経緯についても、久米正雄「風と月と^七」と食い違ふ箇所が存在していることについてだ。「風と月と」で、久米が菊池に送つた手紙の中に以下のように記している。

因みに、僕たちは此頃、夏目漱石先生の所へ、毎木曜日毎に行つて、その聲咳に接するのを楽しみにしてゐる。（中略）芥川も毎回殆ど缺かさない。松岡も最近一緒に行くやうになつた。成瀬は、家の都合で、稀にしか行かないが、成瀬だけは相變らず、ロマン・ローランを師とし、マドモアゼル・ヤマダを友とするだけで、それほど漱石先生の所へは行きたがらない。が、それもいい。

この手紙は京都にいる菊池に送られたものであり、菊池が初めて木曜会に出席するよりも確実に前の出来事であるはずである。しかし、「成瀬は、家の都合で、稀にしか行かないが」と、既に成瀬が木曜会に出席していることを示唆している。「漱石先生と我等」、「友と友の間」の両方で、成瀬が漱石を尊敬しているにも関

わらず一度も会った事がないことから、海外へ渡航する前に会いに行こうという趣旨のことが言われているのに対し、「風と月」では既に成瀬は木曜会に出たことがある上、「何だ、漱石か。」成瀬は、ちらと其表紙を見やつて、續けて云つた。「漱石も、ローン・ローランほど若々しけれやア、愛讀に値するんだがなア。：：どうして日本の作家と云ふものは、爺臭くなるかなア。」として、漱石を尊敬しているという様子も見られない。

「風と月」はかなり後年になつて書かれた文章であり、はっきりと誤りであると判断できる箇所も存在している^五ことから、信憑性が高いとは言えないが、ここにおいても食い違いが生じているのである。

そうして、出席することになった金曜会（木曜会）の様子についても「友と友の間」では描かれる。そちらについても見ていきたい。

初めて出席した金曜会（木曜会）において雄吉（菊池）は、並河（芥川）や久野（久米）などの作品が松本さん（漱石）によつて批評されていくのを聞きながら、「不安及期待と、もた／＼したいら／＼しさで、一杯になるのを感じ」る。それは、個人的に親しいわけでもなく、また小説ですらない自分の作品が松本さん（漱石）に読まれていないのではないか、読まれていたとしても、「初対面と云ふ事實に遠慮して、何等の批評を下さないかも知れない」という不安である。その時の心境について以下のように書いている。

雄吉は、もう可なり悄氣はじめて居た。友達の作品がどれもこれも、松本さん——文壇の泰斗と云つても誰も意義は挟まない——松本さんから、親しい批評を受けて居るのに、同じ×××に載りながら、自分の作品だけが、黙殺されて居ると云ふ事が、堪らないほど淋しかった。

「自分の作品だけが、黙殺されて居る」という不安を、菊池は「友と友の間」において一回の連載分中半分以上にわたつて書いている。しかし、その不安は、「あゝさう／＼、君の脚本も讀んだよ。ありや駄目だね。閻魔が人間を喰ふなんて、何の積であんなものを書いたのかね」という松本さん（漱石）の一言によつて払拭されるのである。雄吉（菊池）の作は決して誉められはしないものの、松本さん（漱石）によつて批評され、雄吉（菊池）は「自分の作品に對する悪評などは、雄吉に取つて何でもなかつた。初対面の雄吉に對しても、何の腹藏もなくズバリと突込んで来る松本さんの眞率な人間的な温味を有難く思はずには居られなかつた」と、松本さん（漱石）の「人間的な温味」を感じるのである。

「友と友の間」内で批評された「脚本」については、「海の勇者」とは異なり、タイトルが明らかにされない。ただ、作中に出てくる「閻魔が人間を喰ふ」というところ、松本さん（漱石）の元を訪れたのが八月と明記されていることから、菊池の「閻魔

堂^{八〇}」であらうと考えられる。

大西貢^八は、「閻魔堂」について、「彼が第四次『新思潮』に発表した六篇の戯曲の中で、最も劣る作品であった」と、失敗作であると断じている。その理由については、「閻魔堂」が「初めてオリジナルな作品を書いてみようとした心がけた」作品ではないかとした上で、「彼は、翻案の如き作品ではなく、オリジナルな戯曲の創造を目ざして、宗教界の墮落とか僧侶に禁欲を強制する事の無理など、旧道徳の批判としての主題にだけ気を取られ、せつかく身につけて来た作劇術の運用には、遂に手がまわらなかつたのかもしいない」と述べた。

また、「閻魔堂」は後にラスト部分を全面的に削除して改作し、「奇蹟^八」と改題して発表されている。そのことについて大西は、『藤十郎の恋』（新潮社・大正9年4月）の「後序」に、『ある奇蹟』は、夏目漱石氏から悪口を云はれたものである。が、自分としては何処かに捨て難いところがある」と記す。菊池が、漱石に会った時、既に「閻魔堂」を発表していたのではないかと、菊池が漱石に「悪口を云はれた」のは、「閻魔堂」ではないかとした上で、以下のように述べている。

それより、彼がその後で、八月に書いた「父帰る」を、すぐ発表せず、敢えて「身投救助業」以下の小説だけを書いて発表している事実に注目したい。何故、彼が小説を書くようになったか。また、「父帰る」の発表を後まわしにして、それより後で

書いた小説を、何故、先に発表したのか。そこには、彼の戯曲が認められなかった事情と「閻魔堂」で失敗し、漱石に「悪口を云われた」ショックが強かった理由があるのではないか。その時、菊池の念頭に、戯曲より小説を発表して、漱石に読んでもらいたい気持があつたのではないか。そこに、戯曲から小説へと転換した一方の状況を観取できないものだろうか。

ここで、大西は、漱石から言われた「閻魔堂」への悪口が、菊池の創作に大きな影響を与えたのではないかと指摘している。その菊池の創作に大きな影響を与えたと思われる漱石の悪口が、「友と友の間」に描かれた「悪評」なのである。漱石の悪口を受けて改作されたとされる「奇蹟」で削られたラスト部分はちょうど、「友と友の間」で松本さん（漱石）が言つた「閻魔が人間を喰ふ」ところだ。この部分について松本さん（漱石）はさらに「あれでは、おしまいに閻魔が、人間を喰ふところが、不自然で、嫌なグロテスクな感じ丈しか受けられないよ」と批判している。そうだとすれば、この場面は菊池にとって重要な意味を持つことになり、自身の創作に大きな影響を与えた漱石の悪口を「友と友の間」で登場させたことにもまた、重要な意味があるのではないだろうか。

本節ではここまで、生きている漱石と菊池寛にまつわる場面を取り上げた。次に漱石の死と菊池寛の関りを見てみたい。「友と友の間」では、漱石の死の知らせを受けた菊池はどのように描か

れているか。

松本さん（漱石）の危篤を杉村（松岡）からの電話で知った雄吉（菊池）はその知らせを、自らが勤める新聞社に伝える。そこで松本さん（漱石）の家へ行き、様子を見てくるように頼まれるが、雄吉（菊池）は「新聞社に入社して以来、一番苦痛を感じた仕事は、不幸や災害の涙に閉ざされて居る人を、訪問する事であった」と言い、そして、「先生の危篤に際して、並河や久野や杉村などは、心から純粹に憂慮し、悲嘆して居る處に、雄吉一人は、記者として仕事をしなければならぬと云ふ事を考えると、彼は何う思ひ直しても松本さんの家を訪ふ氣にはなれなかつた」と、杉村（松岡）に代わりに様子を見てきて教えてくれるよう頼む。杉村（松岡）は了承し、危篤の様子を雄吉（菊池）に伝えてくれるが、「松本さんの危篤と云ふ事實を、眼前に見た杉村は、それから深い感激を受けてしまつて、雄吉の代理人と云つたやうな賤しい仕事をする興味は、少しもなくなつたやうであつた」と、それ以降の代理を杉村（松岡）に断られる。けれども取材を頼まれ、雄吉（菊池）は松本さん（漱石）の家へ向かうことにする。

注目したいのは、その後、雄吉（菊池）が松本さん（漱石）の家を訪ねた後についての描写である。その場面を、以下に引用する。

が、彼が玄關に近づかない前に、玄關の前の植込の蔭に立つて居た男は、雄吉を

「もし／＼」と、呼び止めた。雄吉は、一寸嫌な氣がして立ち止まつた。その男は、雄吉とは一度も顔を合はした事のない門下生であるらしかつた。

「貴君は、新聞記者の方ぢやありませんか。記者の方は、今夜は一切お断りして居ますから」と、云つた。松本さんを常に、偶像視し勝な門下生の人々は、その先生の神聖な嚴肅な死床へは、不純な者は一步も近づけないと云ふやうな決心を持つて居るらしかつた。雄吉は、その世間知らずな、お坊ちゃん的な態度に、職業上から来る反感を懷かずに居られなかつた。

「僕は、×××の木村です。記者として來たものではありません」と、云つた。その人は、直に雄吉の名前は知つて居たと見え、その粗忽を詫げるやうに、コソ／＼と植込の中へ退いた。

（中略）

玄關には、一三人の人達が居た。雄吉は名刺を出して、症状を訊ねやうとした。すると、折よく奥の間から出て來た久野は、雄吉の姿を見付けると、

「あゝ木村かい。先生は三十分も前に、御臨終だつたのだ。君は、金曜會で先生にお目にかゝつた事があるのだから、奥へ通つて先生にお別れをしたらいゝだらう」と、云つた。雄吉は、久野に随いて、松本さんの死床に近づいた。

その時、彼の心から新聞記者としての意識は、もう雲散し盡くして居た。其處には文豪の死と云ふ嚴肅な事實が、ひし／＼と彼に迫つて來る丈であつた。その瘦せはていたましい死顔

に、眼を觸れた時、雄吉の眼にも、涙が溢れた。彼は、何かしら重々しい力に壓倒されたやうな心持になつて、心から頭を下げずには居られなかつた。

「記者の方は、今夜は一切お断りして居ますから」と言われた時、雄吉（菊池）は、「僕は、×××の木村です。記者として来たのではありません」として、自らが記者として訪れたことを否定する。ここまでの連載を読んでいる読者は、雄吉（菊池）が記者として訪れていることを知っているが、雄吉は記者として来たことを否定し、「×××の木村」を名乗ることによつて「先生の神聖な嚴肅な死床」に近づくことを許されるのだ。加えて、実際に松本さん（漱石）の死に顔を見た時、「彼の心から新聞記者としての意識は、もう雲散し盡くして居た」としている。菊池は、この場面において自身の分身である雄吉は、新聞記者としては決して許されなかつたであろう松本漱石（夏目漱石）の死に顔を、「×××」（新思潮）同人として、一人の文士として見ることが許されたことを強調しているのである。

菊池が漱石臨終直後の夏目家を探ねる場面は、松岡の「憂鬱な愛人」にも存在している。その場面を確認し、「友と友の間」と比較してみたい。

そこへ住吉が肩をよつちらこつちら振りながらおづおづと現はれた。秋山はすぐに立つて迎へ入れたが、ともかく書斎へ案内

しようとする、傍から兒玉が今作つたばかりの弔問者の名簿をいぢくりながら聲をかけた。

「恐れ入りますが何卒御名刺をお願いします。」

住吉は氣が咎めるらしく××新聞記者と肩書した小形な名札を、手品のやうに掌の中から取り出した。

「やあ、君が『新思想』の住吉君か。失敬失敬。随分早くきつけて来たものですな。いや、お役目御苦労。」

無遠慮な兒玉の一言に、秋山も住吉もたくらんでゐたからくりが見顯されたかのやうにぎくりとした。

先生の白い床はいつの間にもやたら綺麗に取り片附けられた板の間の書斎に移されて、檜や線香や白い屏風などで佛臭く飾られてゐた。それだけに何となくよそよそしくて先刻程の親しみがなかつた。しかし彼は住吉を導くことをいいしほに、もう一度あかず先生の死顔を眺めた。

一見して分かるやうに、「友と友の間」とは、菊池が漱石の死に顔を見たという事実は一致しているものの、そこに至る経緯が大きく異なる。菊池が『新思潮』同人を名乗る場面はなく、「友と友の間」では久野（久米）の登場により免除された受付での名刺の提出が、「憂鬱な愛人」では行われている。しかも、その名刺は「××新聞記者と肩書した小形な名札」であり、その名刺を受取つた兒玉（赤木桁平）に、「随分早くきつけて来たものですな。いや、お役目御苦労」と、新聞記者として来たことを揶揄するよ

うな皮肉を言われてしまう。そもそも「憂鬱な愛人」では住吉（菊池）は全編を通して徹底して新聞記者として描かれており、疎石（漱石）死後においても「尤も住吉も今日はいつもの文學好きの友人ではなく、通信の役目をもった新聞記者だった」とされている。

久米が「破船」などにおいて松岡や赤木が漱石の臨終に間に合わなかったと書いたことについては、既に杉田[△]が「そこに立ちあうべき存在でなかった松岡はその神聖な継承の機会を永久に失ったと同時に、久米にとっては文豪の死を語る権力の宣言なのである」と指摘している。松岡がこの場面を書いた意図として、「さうして其の爲め先生の臨終に會ふことが出来なかつたとは云へ、こんなに苦しむ友達を助けたことを思ふと、心の底からほんたうにいいことをしたものだといふ感じで慰められるのだつた」と、臨終に間に合わなかったのは事実だが、それは「こんなに苦しむ友達を助けた」ためであると、「破船」に対する自己弁護が考えられる。そのため、住吉（菊池）を助けたことを強調している可能性が考えられ、「憂鬱な愛人」での記述が正しいとも言い切れない。しかし、菊池が「友と友の間」において、漱石の死顔を見るその瞬間だけは雄吉の意識は記者としてのものではなかったことを強調しているのは間違いないだろう。

漱石の死顔を見た後、菊池は記者としての意識に戻り、何とか与えられた仕事を果そうとする。しかし、記者として話を聞くこととする雄吉（菊池）に話をしてくれるものではなく、雄吉（菊池）

の胸には「苦い暗い感情が、渦を巻いて流れ」た。そして、以下のようにして松本さん（漱石）の家を出るのである。

「木村は悔みに來たのではない、記者として種を取りに來たのだ」と、思はれて居やしないかと思ふと、雄吉は一刻も、ちつとして居る心はなかつた。彼は逃げるやうにして、松本さんの家を出た。久野や、並河や、杉村は皆、お通夜すると云つて居た。もし、記者をして居なければ、雄吉も純な哀悼者として、皆と一緒にお通夜も出来るのにと思つた。雄吉には、自分の職業が恨めしく思はずには居られなかつた。戸外に出て見ると、夜はよほど更けて居るらしかつた。編輯へ電話を掛けなければならぬ事を思ふと、彼の心は一層暗くなつて行くのであつた。

先ほども述べたように、菊池は漱石の死顔を見たとき、記者としての意識はなかつたと「友と友の間」は述べている。けれども、その後記者としての仕事をしなければならなくなり、そのことによって「木村は悔みに來たのではない」と思われ、先ほどの漱石の死を悼んだ気持ちを疑われているのではないかと思う。この場面で述べている通り、菊池が漱石の死を悼むとき、その妨げとなつているのは記者としての仕事であり、「記者をして居なければ」と菊池は言う。その時の菊池の置かれていた立場については、松岡も「憂鬱な愛人」内で、「住吉の身にひきくらべて、今の

自分がかうして純粹に落ちついて先生の死を悼むことの出来る幸福」と、その立場の不幸さを述べている。

その後、夏目家に接近する事になった久米や松岡について触れながら、「友と友の間」において菊池は、「松本さんの生きて居る間は、並河や久野や杉村や雄吉の松本さんに對する關係は、そこに厚薄深淺の差異こそあつたが、その性質は同じであつた。が、雄吉は、松本さんの死床に、お通夜をしながら爲、それ切りになつてしまつた」というのである。先ほどの場面で見たと通り、雄吉（菊池）は、「もし、記者をして居なければ、雄吉も純な哀悼者として、皆と一緒にお通夜も出来るのと思つた」としている。

つまり、記者としての職業さえなければ、松本さん（漱石）との關係は並河（芥川）や久野（久米）や杉村（松岡）と「厚薄深淺の差異こそあつたが、その性質は同じであつた」と述べているのであり、漱石と菊池との關係が離れてしまつたのはただ記者という職業のためであつたと弁明しているのである。

ここまで見て来たように、「友と友の間」では、生前の漱石と菊池の關係、また、漱石の死と菊池の關係がかなり強調して描かれていると言える。では、何故菊池はそのように強調して漱石との關係を描く必要があつたのであろうか。考えられる可能性として挙げられるのは、菊池が強調しなければ、菊池と漱石との關係は世間一般において認知されておらず、菊池が部外者に置かれてしまふからということである。

漱石の激賞により文壇に出た芥川や、木曜会に出席し漱石に師

事していた久米や松岡と比べ、同じ第四次『新思潮』同人でありながら、菊池と漱石との關係はかなり薄いと言わざるを得ない。それは、菊池がひとり東京帝国大学ではなく京都大学に進み、漱石にも師事していなかったためである。

また、「破船」事件においても、事件の当事者である久米と松岡、一時筆子の婿候補と目された芥川と比べて、漱石の通夜にも出る事ができなかった菊池の立場は限りなく部外者に近いと言わざるを得ない。「友と友の間」より早く發表されていた久米の失戀物においても、一章一節において述べた通り、「友と友の間」以前には菊池がほとんど登場しておらず、久米が書いた「人の印象」での「同性戀愛の宣傳者」^④と題する菊池寛の印象においても、次のように述べるのみである。

それは私がある破局に際して、その悲痛を誰よりも先に彼に沿経た時である。管々しいその場面の説明は、敢て私もしたくはない。たゞ或る絶望的な一語を、彼の前で云つた時、彼の奥深いあの瞳に、溜めた涙をしばゝいて、黙つて點頭いて呉れた顔を、私は一生忘れないであらう。今後如何に彼から裏切られ、彼から見棄てられやうとも、私はあの顔を思ひ出して、あの顔に凡てを忘れるであらう。かうした場面は、芥川にも赤木にも在つた。そして其各々を忘れないであらう。が、中でも菊池の顔だけは、今だに眼に沁々と残つてゐる。

「友と友の間」より以前、事件の関係者として菊池寛を位置づけようとするならば、それは久米正雄の失恋の同情者でしかなかった。しかも、それは「芥川にも赤木にも在った」ような、菊池だけに特別にあるものではない。菊池が関係してくるのは、久米の失恋後、それを慰める友人役としてであって、事件そのものの、ましてや夏目漱石とは菊池はまるで関係を持たないものとして認識されていたのではないだろうか。『新思潮』の漱石先生追慕号に「漱石先生と我等」は書いていたものの、漱石の死や葬式の様子を描いた芥川や久米の文章と比べて、ただ初めて木曜会に行った時の様子を描いていただけでは、読者の印象には漱石と菊池の関係は残らなかっただろうと推測される。

菊池の事件との関わりが、久米の同情者として認識されていなかったとするなら、大正八年当時創作的に停滞し、そこから脱出を図らねばならなかった菊池が、久米を中心に周囲の友人たちが漱石を利用しようとしている様子を見て、自分も何とか関係者の中に入りこみ、漱石を利用できないだろうかと考えたとしても不自然ではない。

そもそも「友と友の間」というタイトル自体が、漱石の後継者問題の当事者である久米正雄（友）と松岡譲（友）の間にいた菊池寛（雄吉）の存在を強調するものである。「無名作家の日記」において芥川や久米を引き寄せようとしたように、あるいは芥川が「あの頃の自分の事」や「路上」においてマンネリズムからの脱却のために漱石を頼ったように、「友と友の間」においても、菊池

は久米と松岡という二人の友人を通して漱石を引き寄せ、停滞から脱却しようとしたのではないだろうか。

当時存在していたであろう久米の同情者としての菊池のイメージと、「破船」事件、そしてその後ろにいる漱石とを繋ぐ作品として「友と友の間」は描かれたのではないか。

おわりに

漱石を利用しようとした「友と友の間」だが、その反響はどのようなものだったか。新聞小説、それも「長らく文学不毛の土地であつた^{八五}」大阪の新聞であるため、同時代評はほとんど見つけられなかった。中西靖忠^{八六}は、「友と友の間」は久米の有名な失恋事件を、寛の目で見たモデル小説であり、当然のように成功し読者の注目を浴びた」とその成功を述べているが、当時の紙面を確認する限り、読者から特別な反響があつたとは思われない。というのも、「友と友の間」に付けられた挿絵が、かなりおきなりなものであるためである。

「友と友の間」の挿絵については、すでに篠崎^{八七}が、「芥川「路上」第16回（1919.7.17夕刊）と、菊池寛「友と友の間」第18回（1919.9.9夕刊）の挿絵は、眼鏡の若い男が煙草をふかしている図柄が酷似しているほか、「友と友との間」第15回（1919.9.3夕刊）と45回（1919.10.10夕刊）の挿絵は、和服の女性が泣き伏している図柄が酷似している」と、そのおきなり

さを指摘している。加えて、挿絵の有無を確認してみると、連載の前半は挿絵のない回も比較的少なく、夏目漱石や芥川龍之介、菊池寛、上田敏など実際のモデルを思わせる挿絵や、話の筋にあった挿絵が付けられているのに対し、連載が進むにつれて挿絵自体が少なくなり、第三十七回から第四十四回に至っては全く挿絵が付けられていない。最終回が近づく、第四十五回からは再び挿絵が付くのだが、第四十五回、第四十六回、第四十七回と全て妙子（筆子）と思われる着物の女性一人を描いたもので、図柄も同一でこそないが似通っていてかなりおなじりなものだと言わざるをえない。

連載当時そこまで反響がなかったと思われる「友と友の間」が注目を集めるのは、久米の「破船」や松岡の「憂鬱な愛人」の連載開始を待つことになる。「破船」が連載された一九二二年には金星堂から『友と友の間』が刊行され、「憂鬱な愛人」の連載第一回が掲載された『婦人倶楽部』には、「大正文壇モデル總まくり人」と題する「憂鬱な愛人」の予告も兼ねた記事が掲載され、その一作品目として「友と友の間」が紹介される。

また、大正八年の停滞から菊池が抜け出すのは「友と友の間」によってではなく、その後連載された「真珠夫人^{八九}」によってで

あり、同じ題材を扱った「破船」、「憂鬱な愛人」が通俗小説とされていることから同じく通俗小説とされてもおかしうはないはずの「友と友の間」があるにも関わらず、「真珠夫人」が初の通俗小説と位置付けられることで「友と友の間」は黙殺され、現在では単なる菊池の停滞期の創作の一つとされてしまった。

すぐには反響が得られなかったとしても、「破船」や「憂鬱な愛人」が書かれることにより、長期的な目で見れば、「破船」事件の関係者として自らを位置づけようとした菊池寛の試みは、ある程度成功したと言えるだろう。しかし、漱石と菊池を結び付けようとした試みについては、成功したとは言えない。

単に第三者からの「破船」事件についての証言としてのみではなく、「友と友の間」の中にある菊池の意図を探ることで、「破船」や「憂鬱な愛人」と言ったその周辺作品の読み方、加えて、久米や松岡、そして菊池がこの事件について描く事で何を成そうとしたのか、菊池がどのように死によって人格化した夏目漱石という存在を利用しようとしたのかを考える一助になるのではないだろうか。

一 久米正雄「二挿話」『新潮』一九一七年十一月

二 久米正雄「破船」「主婦之友」一九二二年一月〜十月（ただし引用は久米正雄『久米正雄全集 第五巻』本の友社、一九九三年による）

三 田中保隆「久米正雄」「船歌」と鑑賞 臨時増刊号〈近代作家の情炎史〉至文堂、一

九七年五月

四 一九一七年十二月九日付の『東京日日新聞』では、夏目漱石一周忌の記事において、久米正雄と夏目筆子の婚約破棄を報じているが、「漱石氏の後嗣に就て」とし、後継者問題として扱っている。

集 第九卷」本の友社、一九九三年による)

二五 菊池寛「十月文壇の諸事實(一)」『東京日日新聞』一九一九年十月四日

三〇 菊池寛「神の如く弱し」『中央公論』一九二〇年一月

三三 江口渙「邦枝完二」『新年の創作評(五)』『時事新報』一九二〇年一月十日)では、(但し)讀者はこの作品と久米正雄氏の「良友悪友」とを併せ讀んだら多大の興味があふる事と思ふ」と、二作を併せて読むことの興味が指摘されており、加藤武雄「二月の文壇 新年文壇小観」『サエス』一九二〇年二月一日)では、「菊池寛氏「神の如く弱し」『中央公論』は、久米氏の「良友悪友」と共に、實際的興味を以て讀まれさうな作である」として、二作が實際的興味、すなわち同じモデルを扱った作品として共に読まれているであろうことを推測している。

三三「雑記帳」『文章世界』一九二〇年一月

三三 久米正雄「和盤」『改造』一九二二年四月(ただし引用は久米正雄『久米正雄全集 第九卷』本の友社、一九九三年による)

三四 中村星湖「四月の創作(二)」『読売新聞』一九二二年四月四日

三五 片山宏行「菊池寛随想」未知谷、二〇一七年

三六 前田愛「久米正雄の位置」『日本文学研究資料叢書 大正の文学』有精堂出版、一九八一年

三七 谷崎精二「創作月旦 七月の文壇」『新潮』一九二〇年八月

三八 J生「文壇漫語(二)」『やまと新聞』一九二二年四月十四日

三九 松岡譲「耳疣の歴史」『小説』一九二二年二月

四〇 久米正雄「墓参」『改造』一九二五年一月

四一 片山宏行「菊池寛の航跡——初期文学精神の展開——」和泉書院、一九九九年

四二 山本芳明「文学者はつくられる」ひつじ書房、二〇〇〇年十二月

四三 宮本新三郎「大正八年の文壇を論ずる書」『文章世界』一九一九年十二月(ただし引用は『編年体大正文学全集 別巻』ゆまに書房、二〇〇三年による)

四四 清水文吉「本は流れる——出版流通機構の成立史」日本エディター出版部、一九九一年

四五 柴田勝衛「文藝に關係ある新聞及び雑誌の本年度の總勘定」『新小説』一九一九年十月

四六 羊頭狗肉「文壇は疲れてる」『時事新報』一九一九年三月五日〜十四日。この記事

五 片山宏行「菊池寛の航跡——初期文学精神の展開——」和泉書院、一九九九年

六 松岡譲「憂鬱な愛人」『婦人倶楽部』一九二七年一月〜四月

七 松岡譲「憂鬱な愛人」『婦人公論』一九二七年十月〜一九二八年十二月(ただし引用は松岡譲「憂鬱な愛人」第二書房、一九三二年による)

八 関口安義「評伝 松岡譲」小沢書店、一九九一年一月二十日

九 小谷野敦「昭和恋愛思想史 第三回 失恋小説の誕生」『文学界』二〇〇三年

一〇 神崎清「名作とそのモデル」東和社、一九五〇年

一一 菊池寛「無名作家の日記」『中央公論』一九一八年七月

一二 片山宏行「菊池寛随想」未知谷、二〇一七年

一三 久米正雄「受験生の手記」『星潮』一九一八年三月

一四 久米正雄「螢草」『時事新報』一九一八年三月〜九月

一五 久米正雄「天囚日記」『新潮』一九一八年五月

一六 片山宏行「菊池寛随想」未知谷、二〇一七年

一七 江口渙「わが文学半生記」青木書店、一九五三年七月

一八 田中保隆「久米正雄」『解釈と鑑賞 臨時増刊号(近代作家の情炎史)』一九七一年五月

一九 関口安義「評伝 松岡譲」小沢書店、一九九一年

二〇 菊池寛「その月その月」『文藝春秋』一九一三年七月(ただし引用は、菊池寛『菊池寛文学全集 第六卷』文藝春秋新社、一九六〇年より)

二一 久米正雄「天囚日記」『新潮』一九一八年五月

二二 久米正雄「夢現」『新潮』一九一八年十一月

二三 久米正雄「敗者」『中央公論』一九一八年十二月(ただし引用は久米正雄『久米正雄全集 第九卷』本の友社、一九九三年による)

二四 小谷野敦「久米正雄伝——徹苦笑の人——」中央公論新社、二〇一二年

二五 芥川龍之介「あの頃の自分の事」『中央公論』一九一九年一月

二六 日比嘉高「文壇は閉じているか——大正文壇・交友録・芥川「あの頃の自分の事」——」『国語と国文学』二〇〇八年三月

二七 芥川龍之介「路上」『大阪毎日新聞』一九一九年六月〜八月

二八 久米正雄「良友悪友」『文章世界』一九一九年十月

二九 久米正雄「帰郷」『人間』一九一九年十一月(ただし引用は久米正雄『久米正雄全集

が菊池寛によるものであることについては、中西靖忠『菊池寛と新聞（上）——泣菫への四書簡を中心に——』『高松短期大学研究紀要』一九七九年が明らかにしている。

四 片山宏行『菊池寛の航跡——初期文学精神の展開——』和泉書院、一九九九年

四 『毎日新聞七十年』毎日新聞社、一九五二年

四 篠崎美生子『芥川』をつつたメデューザ——『大阪毎日新聞』の小説戦略——『恵泉女学園大学紀要』二〇一四年

五 三好行雄『芥川龍之介論』筑摩書房、一九九三年

五 日比嘉高『二文壇』は閉じているか——大正文壇・交友録・芥川「あの頃の自分の事」——『国語と国文学』二〇〇八年三月

五 前田潤『菊池寛「登場」の内幕——「文壇」を睨む「無名作家」——』立教大学日本文学『一九九六年七月

五 前田愛『久米正雄の位置』『日本文学研究資料叢書 大正の文学』有精堂出版、一九八二年

五 神崎清『名作とそのモデル』東和社、一九五〇年

五 『友と友の間』では失恋後の久野（久米）が大阪行きを考えた時に、その職の斡旋をしたのは雄吉（菊池）であり、中学教師と新聞記者の就職口を用意するも、中学教師については久野（久米）が嫌がり、新聞記者についても「久野は、京橋の旅館で、この編輯長と逢った」が、久野の風采は相手の好感を獲なかった。中略 久野の大阪行きは頓挫してしまつた」として、久米は後に「岐路」『文藝春秋』一九二三年六月」という文章を書き、そこで「涙ながらに大阪落ちを計畫し、時機朝日新聞社に、當時社會部長として居られた如是閑氏の配下の二員に加へて貰ふべく、友人の鈴木善太郎氏に頼んで、懇願して貰つた事」を語っている。ここで久米は大阪の新聞社に就職するために協力してくれたのは鈴木善太郎であると、菊池だとはしていない。このエピソードが「友と友の間」に描かれたのと同じであろうことは、「朝日の編輯長が何かをして居られた鳥居素川氏」と旅館で実際に会い、就職を断られたという経緯がほとんど同じであることから明かである。菊池はこの「岐路」に対して「岐路（当時）」という文章を書いているが、久米の語つた経緯について否定せず、さらに「僕は大阪行きに反対し、新聞小説を書かせた」と、あくまで自分が大阪行きに反対する立場であつたことを語っている。以上の事から考えるに、「友と友の間」における久野（久米）に対する大阪での就職支援の場面は、菊池の創作である可能性が高いと

言えるだろう。また、「憂鬱な愛人」は、「實はね、此間うちから住吉が三木の關西落ちの肝入りをして、彼方の新聞社の重役が上京したのをつかまへて會はせたり、それから學校の照會をしたりして」と「友と友の間」で語られたエピソードを採用している。

五 菊池寛『平目叙伝』『文芸春秋』一九二八年五月・一九二九年十月（ただし引用は広津和郎・菊池寛『日本の文学』広津和郎・菊池寛、中央公論社、一九六九年による）

五 菊池寛『二統』半目叙伝『新潮』一九四七年五月・六月（ただし引用は広津和郎・菊池寛『日本の文学』広津和郎・菊池寛、中央公論社、一九六九年による）

五 天松岡謙『憂鬱な愛人』は、久米正雄「破船」に対する抗議や対抗意識が強く、そのために松岡が創作、あるいは誇張したと思われる箇所が多いため、食い違いを見るにあまり適して居ないと考え、今回は「破船」を中心に「友と友の間」と比較し、その食い違いを考える参考として「憂鬱な愛人」を用いた。

五 五 〇 嬢君は、漱石氏の愛嬢、好事魔多しと久米君 〇先輩の門弟諸君が 〇敦圀荒きおとり刀『東京日日新聞』一九一七年十一月九日

〇 夏目漱石『それから』『東京朝日新聞・大阪朝日新聞』一九〇九年六月・十月

〇 西田将哉『坊っちゃん』の大正と昭和・漱石神話 形成の側面『早稲田大学大学院文学研究紀要 第3分冊』早稲田大学大学院文学研究科、二〇一五年

〇 大山英樹『漱石神話』の生成とその影響・小宮豊隆『夏目漱石』を中心に『青山総合文化政策学』青山学院大学、二〇一三年三月

〇 日比嘉高『破船事件と実話・ゴシップの時代』『文学』二〇〇〇年九月

〇 山本芳明『文学者はつくられる』ひびき書房、二〇〇〇年十月

〇 中山昭彦『赤木桁平』『漱石辞典』翰林書房、二〇一七年

〇 赤木桁平『夏目漱石』新潮社、一九一七年

〇 杉田智美『漱石を継承する——「破船」事件と嫉妬する男の物語』『国文学 解釈と研究』二〇〇九年七月

〇 ただし、大山が「漱石が「則天去私」について語つたことを記したものとして知られる」としている久米正雄「永久の青年」夏目漱石氏——『文章俱樂部』一九一七年一月について確認したところ、少なくとも久米の文章内には「則天去私」に触れた記述は見られなかった。

六九 菊池寛『漱石先生と我等』『新思潮』一九二七年三月（ただし引用は広津和郎・菊池寛『日本の文学』広津和郎・菊池寛『中央公論社』一九六九年による）

七〇 相原和邦『漱石山脈』事典』『別冊国文学・夏目漱石事典』學燈社、一九九〇年七月

七一 漱石の病状について、江口渙『わが文学半生記』では「前に修善寺の大患のときは、そのことが新聞にのると日本中から見舞がきて、返事をかくのにこまるほどだった。で、こんどはよくなるまでは絶対に發表せずにおこう、ということになった。久米正雄さえしなかった」とされており、「破船」においても、「少し前から、加賀の金澤に居る舊友から送られた鵜の粕漬を食べて、宿痾を悪くしたことが、門弟たちの間に傳へられてゐた」ものの、小野（久米）らは重症だとは知らされておらず、危篤の知らせを受けるまで、さして心配もしていない。「憂鬱な愛人」でも漱石の病状を深く心配する描写はなく、この点においても「友と友の間」は食い違っている。

七二 夏目漱石『明暗』『東京朝日新聞・大阪朝日新聞』一九一六年五月〜十二月

七三 西田将哉『坊っちゃん』の大正と昭和・漱石神話 形成の側面『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊』早稲田大学大学院文学研究科、二〇一五年

七四 夏目漱石『三四郎』『東京朝日新聞・大阪朝日新聞』一九〇八年九月〜十二月

七五 夏目漱石『坊っちゃん』『ポトギス』一九〇六年四月

七六 石崎等『漱石生活風俗事典』『別冊国文学・夏目漱石事典』學燈社、一九九〇年七月

七七 菊池寛『海の勇者』『新思潮』一九一六年七月

七八 久米正雄『風と月と』『サンデー毎日』一九四七年四月〜一九四八年三月（ただし引用は菊池寛・久米正雄『日本現代文学全集』菊池寛・久米正雄集 講談社、一九六七年による）

七九 久米正雄『風と月と』においては、菊池が「藤十郎の恋」の代わりに京都から送って来た作品を「身投救助案」（『新思潮』一九二六年九月）であるとしているが、実際には「暴徒の子」（『新思潮』一九一六年三月）である。

八〇 菊池寛『闇魔堂・戯曲断片作』『新思潮』一九二六年八月

八一 大西貢『菊池寛の作劇精神とその崩壊過程——『闇魔堂』の改作と『父帰る』前後——』『日本文学研究資料叢書 大正の文学』有精堂出版、一九八一年

八二 菊池寛『奇蹟』『我鬼』春陽堂、一九一九年

八三 杉田智美『漱石を継承する——『破船』事件と嫉妬する男の物語』国文学 解釈と研究』二〇〇九年七月

八四 久米正雄『同性戀愛の宣傳者』『新潮』一九一九年一月

八五 真銅正宏『明治大正期の商業都市大阪における文学』『文学』二〇一四年五月

八六 中西靖忠『菊池寛と新聞（上）——泣菫への四書簡を中心に——』『高松短期大学研究紀要』一九七九年

八七 篠崎美生子『芥川』をつづいたメディア——『大阪毎日新聞』の小説戦略——『東京大学文学研究』二〇一四年

八八 青木命雄『大正文壇モデル總まくり』『婦人倶楽部』一九二七年一月

八九 菊池寛『真珠夫人』『大阪毎日新聞・東京日日新聞』一九二〇年六月〜十月

九〇 菊池寛『真珠夫人』『大阪毎日新聞・東京日日新聞』一九二〇年六月〜十月